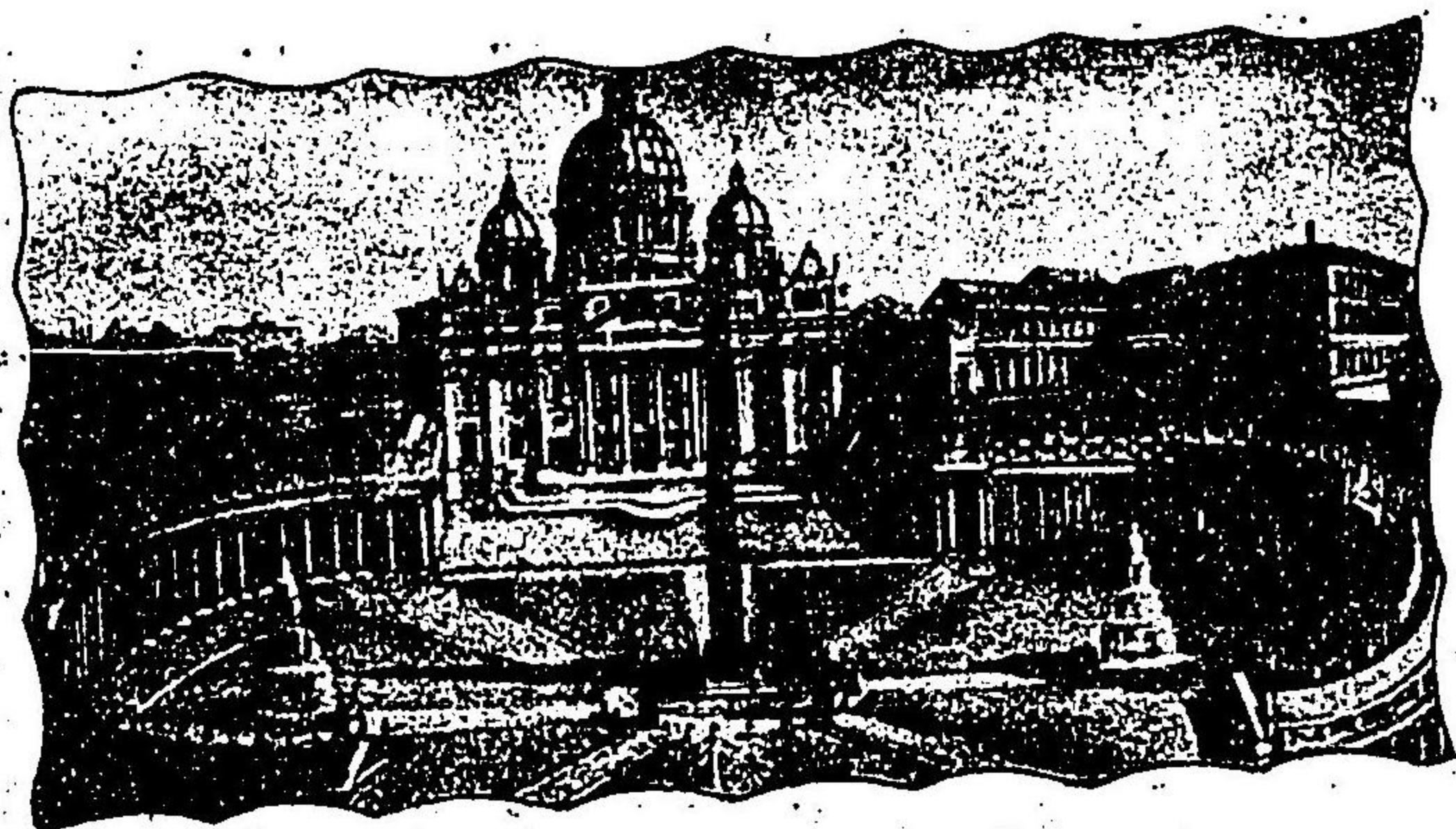


寺内も明るい。こゝには紀元前七年のアグリッパの墓、稀世の畫家ラファエルの墓の外に伊太利皇室の御墳墓がある。先日久邇宮殿下の御光臨があつて、陵前に花環を捧げられたさうである。是所を出で、見素ぼらしい貧民窟を通はり行くに、こゝらが昔の羅馬時代の都會であつたげな。貧民の兒等が我等を追ふて、翻筋斗をやつて見せ、錢をねだりに来る。タイバー川の橋を渡る。橋梁の臺に、ピータ、ポドロの像が立つて居る。對岸に渡れば、圓い城がある。セント、アンゼロ城と云ふて、ハドリアン帝以後カラカラ帝迄での諸陵のある所だ。

更に進むで、有名な聖彼得寺院に參詣した。正面の伽藍は古色蒼然たる大寺院で、其の屋根は穹隆型の圓塔高く空に聳れ、其の左右に小圓塔を控へて居る。寺院の両側から、前方へ弓形に、大廻廊が延びて突き出て居る。其の上には使徒の像がすらりと並んで居る。此の廻廊の中央に、紀念碑が立つて居る。此の寺院は、昔ネロ暴帝の住家の跡に、コンスタンチン大帝の時に建てられたが、十六世紀の時更に建築家ミケランゼロに依り

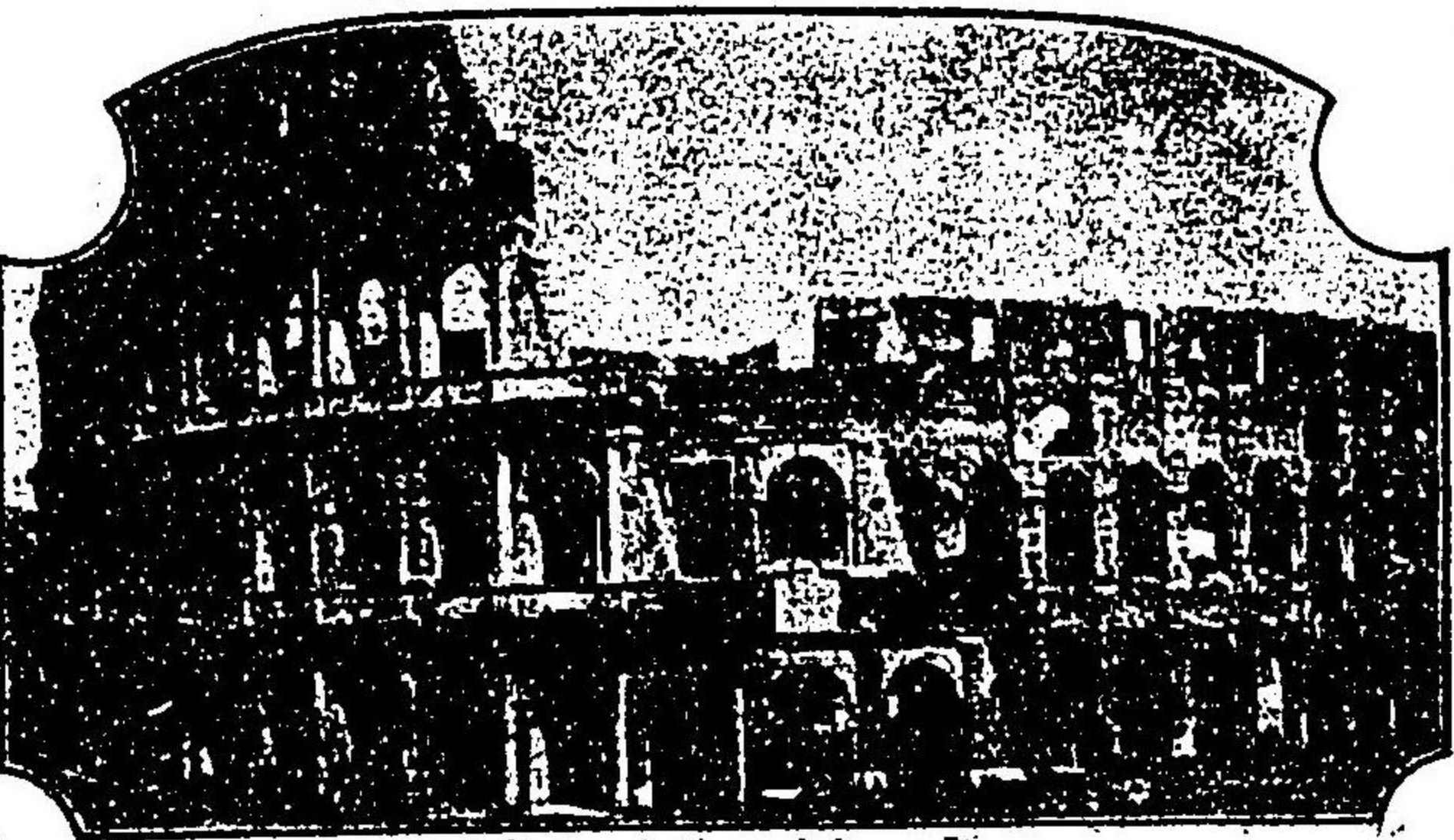


聖彼得寺院

て、改築された大寺院である。先づ魚鱗の如き石階を上つて行くと、大理石の圓柱が外天井を支へて、林のやうに樹つて居る。寺内に入れば、其の廣大な事確かに一驚させるのである。堂の面積は一萬八千方ヤードで、倫敦のセント、ポール寺院の二倍であると云ふ。又其の壯麗な事は、金銀珠玉の類を盡して、燦然として輝き眼も眩まんばかりである。奥へ行くと不夜燈があつて、其の傍にポドロの埋跡がある。森嚴を極めて、おのづから襟を正さしめる。シャイレマン大帝戴冠式の跡石、ピータの撫れ佛の足、赤銅の天蓋、法王一世の椅子、ピータ、ポドロの鍵など見て、外に出づ。午後三時見物に出る事を約して、案内者と別れ、馬車を軋らせてホテルに歸へる

晝の暑つさを避けて、午後三時見物に出づ。馬車は圓ある敗垣殘櫓の前に停る。是は即ち歴史に名高い、コロシヤムの演武場なのである。僕が馬車から下りると、花賣りの女がやつて来て、襟のどこへ、無理に挿さうとするから、突きのける。其れと見た巡查が走つて来たから、彼の女は何所かへ行つて終ふた蜂巢のやうになつて居る土塀の入口から潜つて、中に這入つて見た。昔は壯麗天下に比ぶ物が無かつたと聞くが今は荒れ果て、草蓬々と生れて、見る際もない哀われな様である。周圍の階段は其の昔棧敷であつて、六萬の見物人を入れた所である。暴君ネロ、ドミシヤンなどが棧敷の中央にあつて、美人雲の如く居流れ、羅馬の市民是れを取り圍むで、無辜の民を猛獸の餌食にした事を思ひ出させる。是れを聞く、チト

コロシヤムの演武場

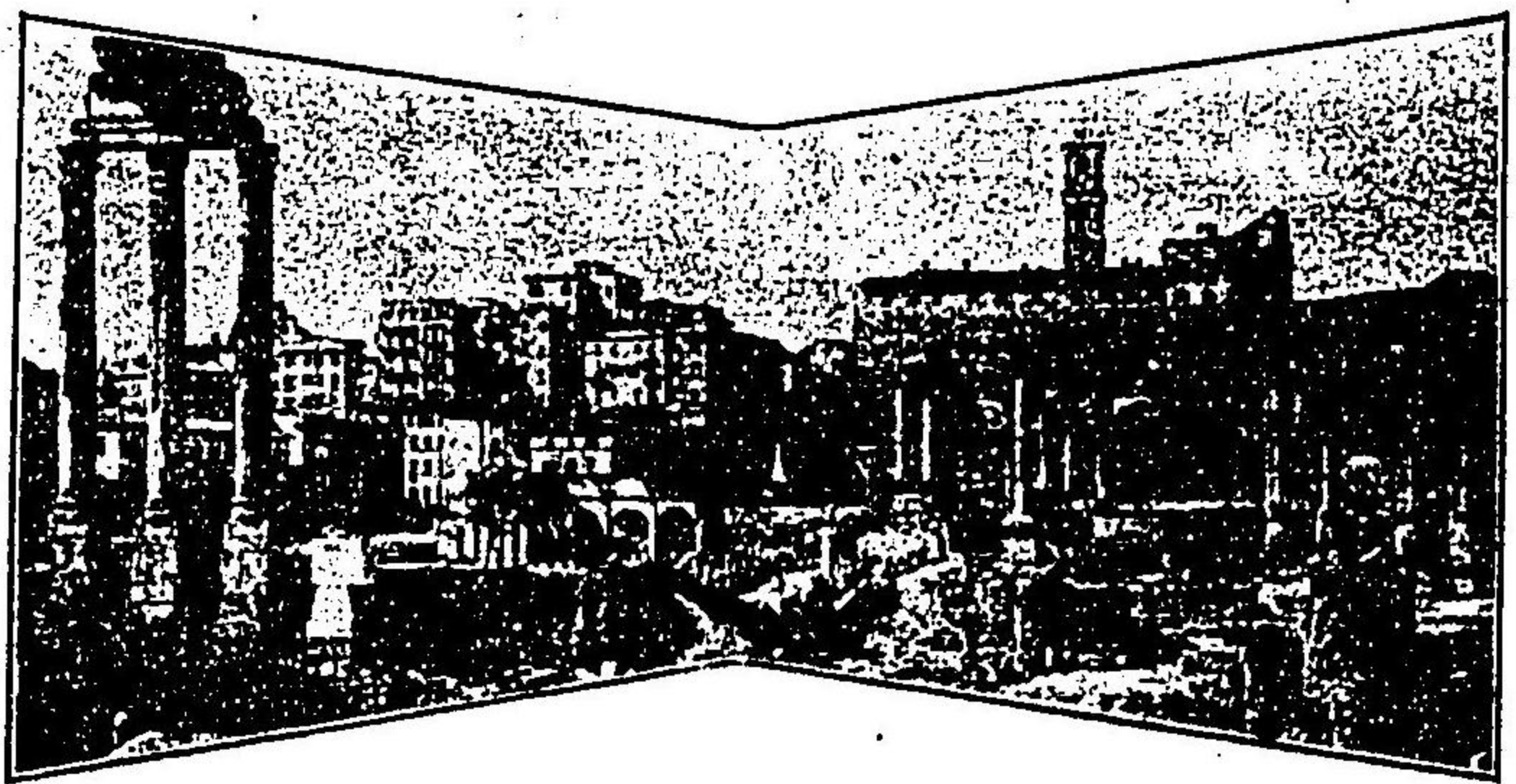


ス帝とやらがコロシヤムの工を竣へた時、百日間劔客の大演武をやつて、市民の歡心を買ふたと云ふ。其の眞劔勝負さへ酷いのに、あたり罪もない基督教徒や、思も怨もない囚徒などを、演武場の眞中へ引張り出して、獅子や、虎に格闘させたのである。

猛獸の咆吼、泣き叫ぶ奴隷、婦女子、小兒の類ひを思へば如何に凄慘であつたらうか、今聞くさへ悚然として膚に粟の生ずる思ひがする。流血淋漓大地に流れて、血みどろになつた死骸が轉つて、首や手足がちぎれて、彼ちらにも、此ちらにも飛んで居る。那麼殘酷な光景を、羅馬人は屁とも思はず、却つて熱狂するが如くに喜んで見たのである。以て如何に、羅馬の末路が慘憺たる物であつたかを知るであらう。遮莫コロシヤムは羅馬の盛時を飾ると共に、羅馬の滅亡を示す好個の遺蹟である。或る人コロシヤムあらん限りは羅馬榮ゆべく、コロシヤム倒れん時羅馬も亦倒れんと歌ふた。然るに羅馬倒れて千幾百年、コロシヤム獨り去にし昔の遺骸を止めて居る。されど此のコロシヤムは、久しい間土中にあつたのを、伊太利政府の手にて掘り出されたのである。曾つては中世の

時蠻族の城砦に使用された事もある。地震の爲めに碎れたり、タイバー川の洪水に埋められたりしたこともあると云ふ。

次ぎに亦有名なパラチン丘の上に現はれる。瞰下せば、フオラムの跡！累々たる殘礎突兀たる柱梁など立ち並んで、宛るで火事場の跡のやうに、狼藉たり。宮殿や、市街や、劇場など皆こゝにあつ



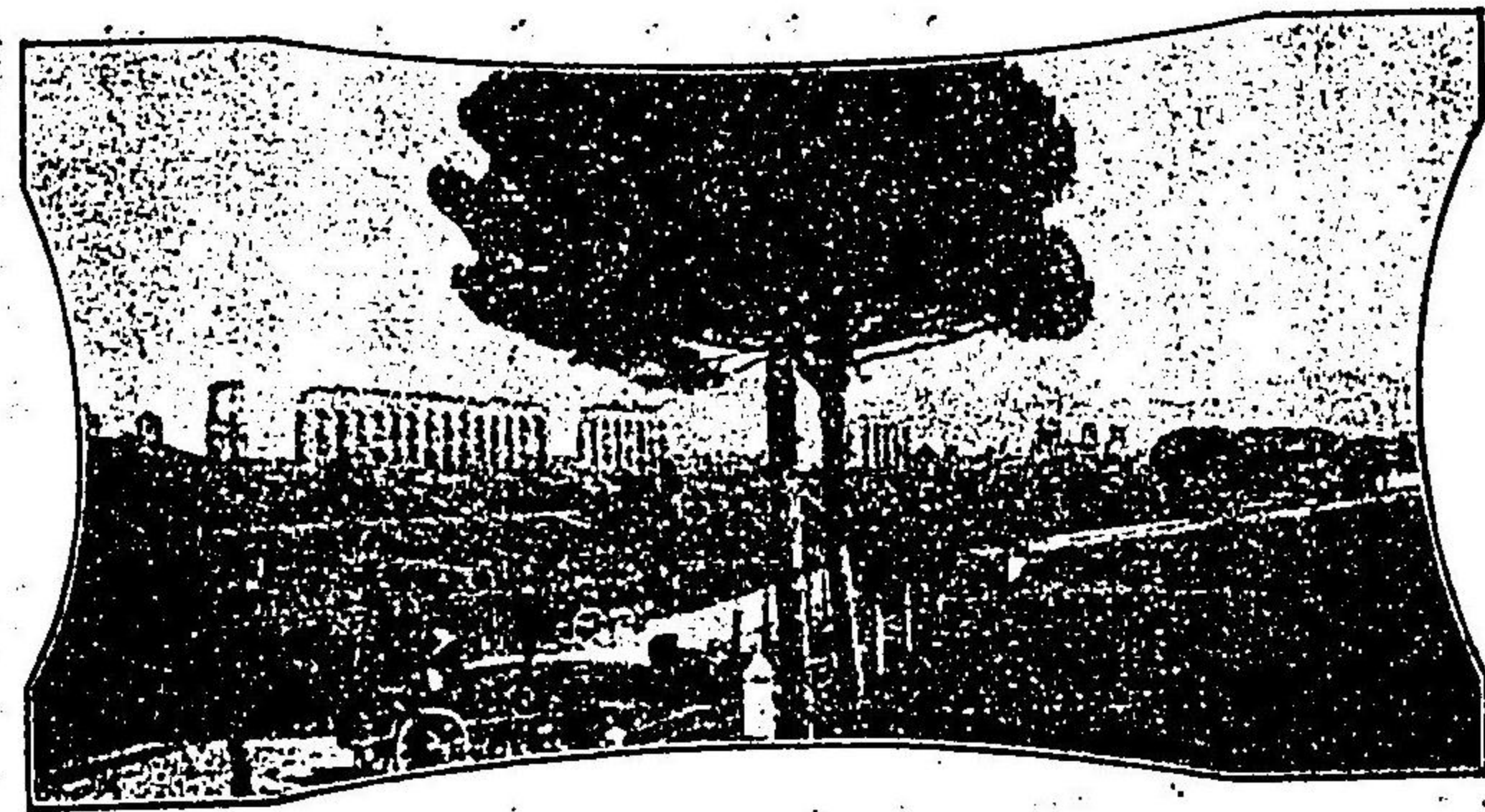
跡のロオフ

×たのであらう。多くの英雄、帝王、美人も皆こゝに住んで居たのであらう。彼のシーザが殺された議場も、こゝにあつたのであらう。嗚呼羅馬の極盛時は甚麼に華やかであつたらうか 思ひ返へせば、唯茫然轉々人生の果敢なきを感じた。姑し脚躡低徊去るに忍びなかつたが、馬車に乗つて、

シーザの爲に建てたと云ふ凱旋門を潜つて行く。

時に鎬々たる鐘聲を後に、馬車を走らせて行くと、彼のカルタゴを破つた勇將シツピオの墳墓の前を通はる。其の中使徒ピータが羅馬を逃れ出やうとして、何處へ行くかと問はれて、後戻りしたと云ふカムパニアの原に出る。こゝには名物の酒があると云ふに於さらばと云ふや、馬車はいと怪しげな籬垣の中へつき入る。汚い土塀の家の前へ行くと、女が白葡萄酒をコップに入れて持つて来る。成程プンと香ひがして、鳥渡旨い。皆女に擁揄ふて、間もなく其處を出で、馬車で亦カタコームの小寺を訪ふ。坊主が殊勝らしく讀經して居る。僧が我等を地下室へ導びく、皆細い蠟燭に燈つけて、むさ苦しい土の隧道を潜つて行くと、左右に穴があつて、其處に骨と觸骸と散らばつて居る。こは昔基督教徒の迫害された者の爲めに、埋めた所であると云ふ。さても我等は御苦勞千萬な胎内潜りをやつて地上に出る。心附けを少し僧にやつて、外に出で馬車に乗る。

今通はる所は昔武勳赫々たる戦士等の、凱旋した時に、通行した道路である。馬車の上



大水道の跡

から、低い塀の上を越して見ると、小高くなつた所に、少々半ば毀れた壁が残つて居る。是れこそ昔のカラカラの浴場の跡である。其の外唯一面に、青い芝生が生々繁つて、眞とにからくになつて居る。カラカラと云へば子口に劣らぬ悪虐無道の暴君であつたが、唯自己の地位を守らんが爲めに、市民に媚びて、此處に大浴場を建てたのである。其の面積が實に三萬餘坪、浴室の數だけでも千六百あつたと云ふ。風呂にも種類があつて、蒸氣浴、冷水浴、温湯浴などの設備があつて、未だ其の上に、運動場、談話室、圖書室、競馬場などがあつた。當時の羅馬人が此處へ來て、終日のらりくらりと遊び暮らした所である。

馬車は方向を轉じて。羅馬の寂びれた郊外を巡つて行く。不圖彼方に、切れぐの土塀が續いて居る。あれは羅馬當年の大水道の跡であると云ふ。振り返れば羅馬の古城跡！碎れた土垣、破れし柱梁など影法師のやうに立つて居る。歲月流るゝが如く、日月移り變はりて幾變遷、徒らに千年後の遊子をして、此の慘狀に歎かしむるとは、あゝ春閨夢裡の人今はたいづこにかある。當時のローマ人はゆめ此處あわれな様にならうとは思はなかつたであらう。是れがむかし榮華しローマの都とは思はれない。されど唯嘲けるを已めよ、古盛へし國亡びし如く、今盛ゆる國いつか亦かゝる運命になり果てんかと誦へば、いとし無量の感慨に堪へなかつた。されど唯悲しむを已めよ、ローマは亡びしも文明は亡びず。文明の流れは滔々溶々として今に傳へ來つた。近世の文明は、何んぞ知らん、此の汚ないローマから起つたのである。我等が羅馬に節を曳きし所以のものは全くこれのみ。

路傍の芝生に、多くの男女が辨當を展いて居る。けふは五月三十一日で、基督教の盆祭

りて花行列があると云ふ。馬車を停めて、旗亭の前に居ると、汚い伊太利人が酒を飲む
 たり、ムシヤ〜口を動かしたりして居る。今か〜と待つて居ると、花自轉車、花自
 動車、馬に花つけた車、鈴つけた馬、空中飛行機を載せた自轉車なんぞが、折り〜出
 て来る。是れに乗つて居る者は皆貧民で、何んの事は無い、小供騙まし見たいな行列で
 ある。此麼詰らぬ祭りに、酒飲むだけ、物喰ふたりして見て居る伊太利人を見ると、亡
 國の祭りも亦あわれなものかなと思ふた。案内者が我等の催促も聞かずに、凝つて見て
 居やがる。終ひに一喝して、馬車を動かさせた。人だかりの多い中を行くと、伊太利人は
 我等を見て、ジヤポ子〜と呼ぶに、厭氣さして、腹立たしくなつて来る。やつと群
 衆の中を通はり抜けて、羅馬の街に入る。

(二)

●六月一日 晴天 日本人の旅行者―グチカム宮―眺望―ガリバルデの銅像―

諸寺院

けさ我が部室へ這入つて來た日本人があつた。其の人は臺灣總督府の檢察官加福君と云
 ふ人である。同君は各國の裁判事務の視察を命ぜられて、單獨旅行して居ると云はれる
 話を聞くと、何でも亞弗利加から伊太利へやつて來た人で、中々の大旅行家である。
 朝馬車に乗つて、グチカム宮へ行く。其處は乃ち法王の住むて居る所である。昔は帝王
 も及ばぬ勢力を持つて居た法王も、今は政權を失ふて、唯舊致の覇權を握つて居る丈で
 ある。グチカム宮は聖彼得寺院の裏にあつて、我等の馬車はそこへ廻はり込む。廊下に
 入ると、博物館のやうに、無數の彫刻、塑像を陳列して居る。中にも最も珍らしいのは
 テオコーンの本物と、ナイルの巨人像である。前者は希臘の作で、或る男が蛇に巻き付
 かれて居る所、後者は裸体の老人が横臥して居る上へ、無數の小兒が這ひ上つて居る所
 である。其の意味は、埃及のナイル河が時々溢れて、其の沿岸の土地を肥やす爲めに、
 人類に至大の恩澤を與へると云ふ寓意を表示したのやさうな。如何にも、其の技術が神
 妙を極めて居る。その他埃及物や、希臘時代の塑像や、羅馬時代の彫刻が數知れずある

彼のフオーロから掘り出した壁の破片まで、廊下の両側に張り付けて居る。廊下を出ると、ミケランゼロの意匠になつたと云ふ、五彩の美しい制服被た警固の兵が立つて居る。此の棚機のやうな兵は、舊教の瑞西から出た法王の護衛兵である。我等は其處から法王宮の畫室に入る。繪畫は天下有数の寶物で、ラファエル、ミケランゼロ等の理想的宗繪畫で、何れも稀世の作ばかりである。是れ等の名畫を見盡くして、此の殿堂を出で、彼の棚機兵の前を通ほり、再び廊下を巡つて、やがて法王宮を出る。

我等の馬車は或る丘上の寺院を訪ふ。姑し脚下に羅馬を眺めて、彼方アペナウン山脈の打ち續ける伊太利の野、其の風光得も云はれず。

晝は亦午後三時に、馬車に投じて、見物に出掛ける。アカデモイと云ふて、美術研究所の前を通ほる。此處は昔ガリレオの監禁所であつたと云ふ。子ロ暴帝の宮居の跡を通つて、市街を走り、ジヤニコロ丘に登る。其處に、馬上に跨つて居る、ガリバルジの銅像が立つて居る。彼れはカブールと共に、ヴィクトル、エマヌエル帝を助けた、伊太利

統一の元勳である。白山君是れを見て、アー歴史の試験の時、困らしたのは此奴やなど云へば、皆墳墓出して笑ふ。馬車は坂を下りて、遠く是れを見れば、馬上の將軍すらりと立つて居る姿いかにもよい。跳ねて居る馬上の銅像よりも、却つて此の方が宜いとして皆感心す。かくて羅馬の街を紆ねくり廻つて、某寺院を訪ふた。僧が拜壇に案内したが、窓ガラスを見ると、近頃の寫生風の繪畫であつた

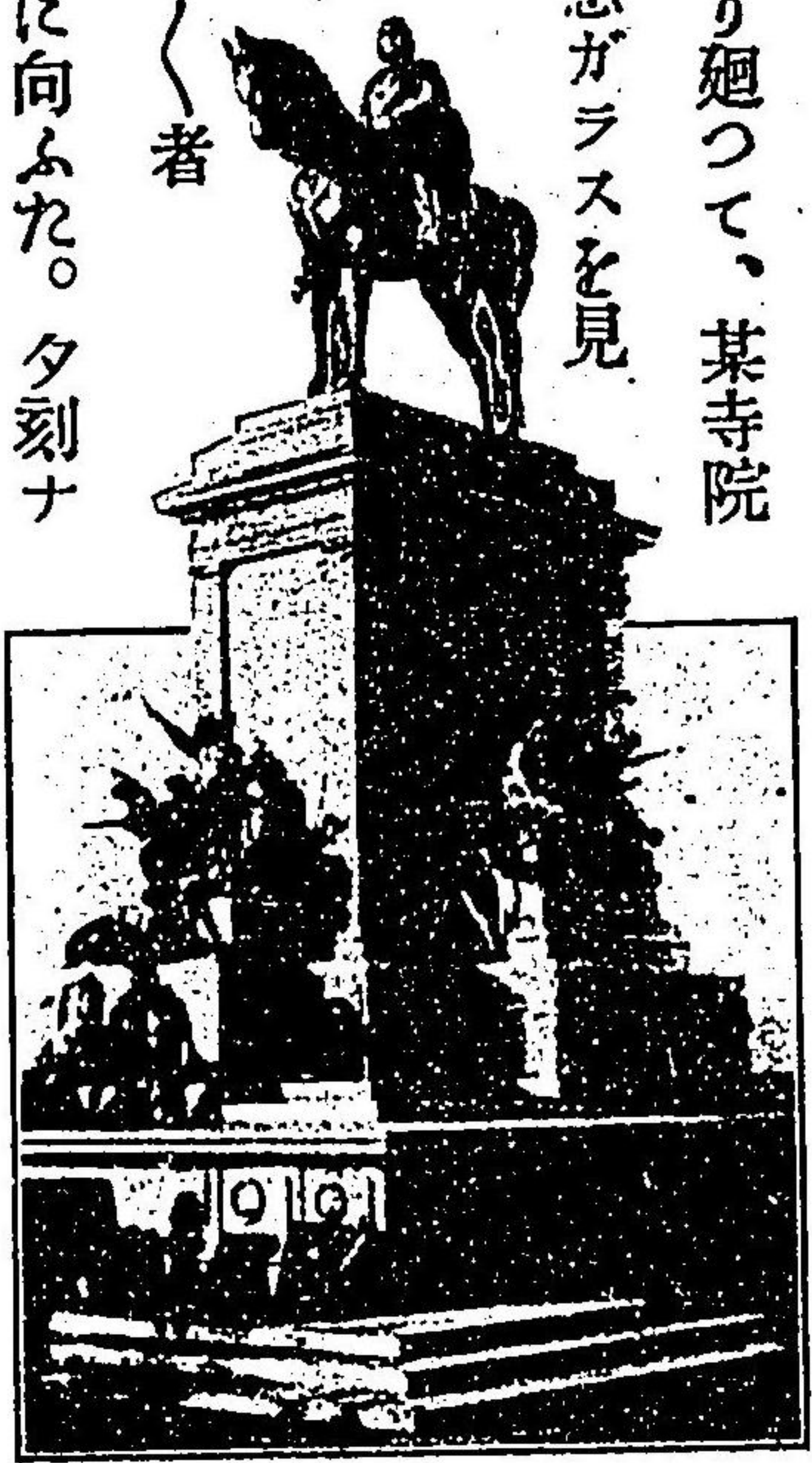
● 同二日 晴天

火山の煙むり

賑やふ街にこゝろ者

今朝羅馬出發、南方伊太利のナポリに向ふた。夕刻ナ

ポリに近づいた頃、ヴェスピアス火山はほのかに煙むりを出して居る。恰かも日本の富士山のやうに、裾長く垂れた圓錐形の山である。ナポリについて、馬車に乗つて行くと賑やふことローマ以上である。道路の汚穢なこともローマ以上である。ホテルの晚餐後



像銅のガルバリガ

食堂を出ると、別室にメレンダー君は多くの少女連と食事をやつて居る。皆冷やかすどにこくして居る。

ポンペイ廻跡

●同三日 晴天 貧民窟—グエスピアス噴火山—ポンペイの跡—錢取る音楽

けふは彼のポンペイの跡を見やうとして、ホテルを出た。ナポリの街を歩いて、エルモカストル、離宮、古物市場などの前を通はり、十二世紀頃から残つて居る貧民窟へ出る。赤や青の古衣が窓にかゝれる、門口に油であげたパンや、バターに一杯蠅がたかれる、襤褸を纏ふた兒等が多く遊べる、其れはく其の汚い事といつたら、鼻持ちならない。其處を真直行くと、十三世紀の建築バルコ子寺の前に出る。而かも滑稽、今は此のお寺が檻獄になつて居るとさ。其れから少し先きへ行くと、一寸した廣場がある。其處は千八百四十一年伊太利の革命の聲を擧げた所である。初めは不成效に終つたが成效し、千

×を敷設したのである。外國人と

一所に此の電車に乗り込む

と、スーと登つて行く、

其のうちアプト式にな

つて、餘程の急勾配を

斜に登つて行くと、三

年前破裂した土塊が堆

高く重なつて埋つて居

る。電車は火山の中腹

に停つたから、皆仰りて見る

我等は更に馬に乗つて、噴火山

の絶頂を極めやうと思ふたが、

八百七十二年ガリバルヂがロ

ーマに突き入つたのである。

かくて電車に乗つて、

或る停車場で下りて、

馬車を驅り、グエスビ

アス火山の麓についた

こゝに登山鐵道があつ

て、クック社の經營に

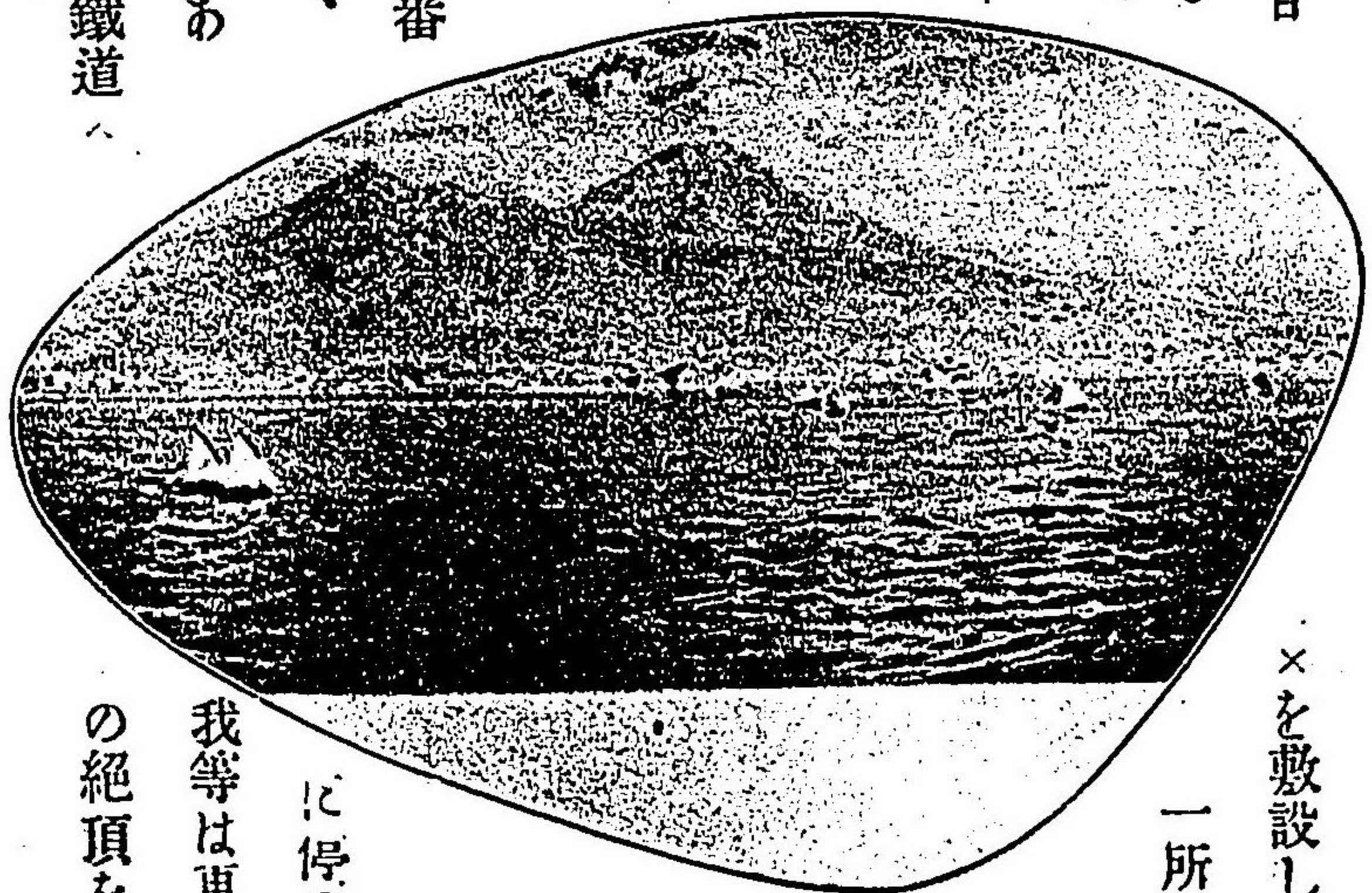
係るのである。遊覽客の一番

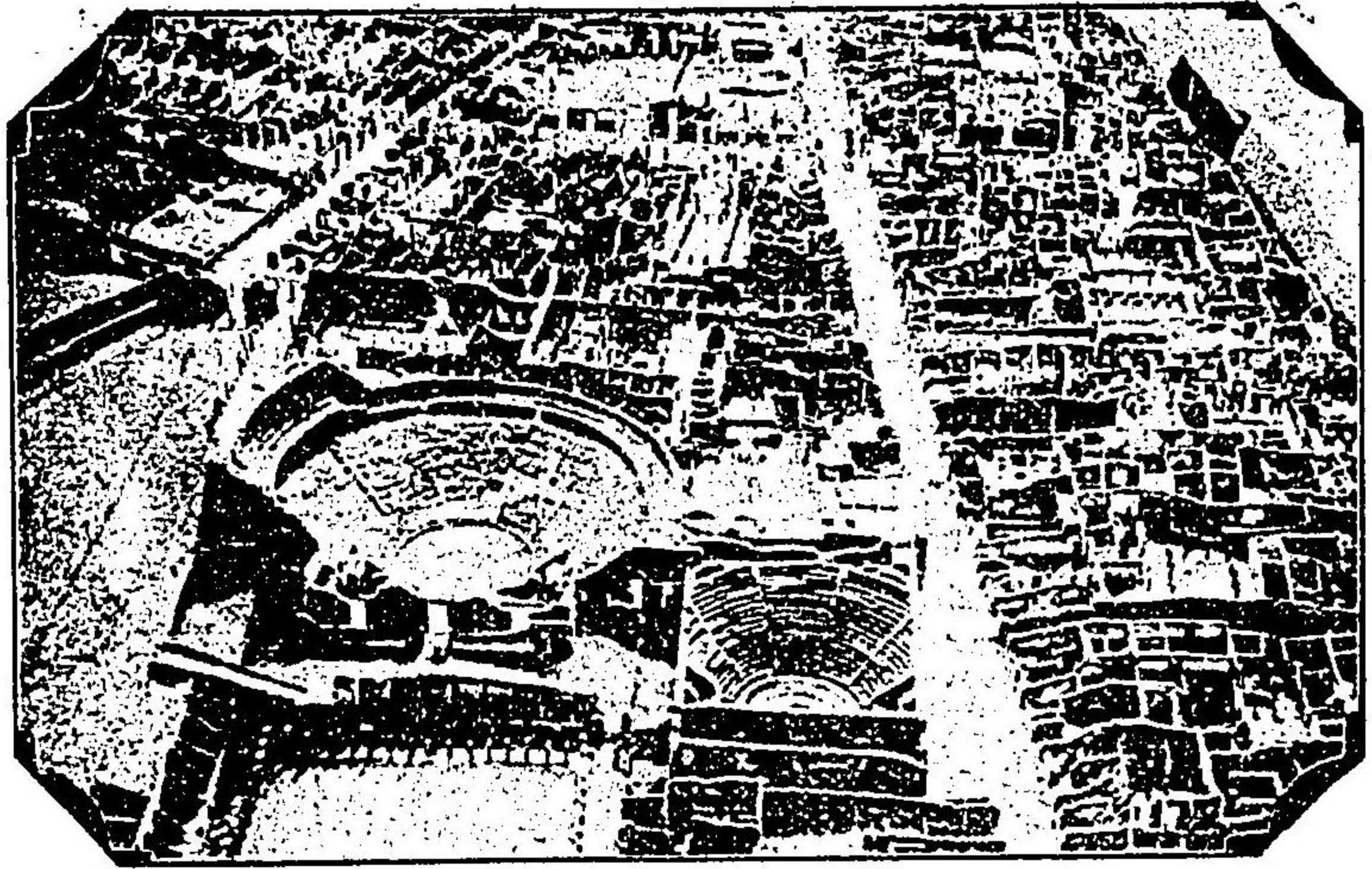
多いのは伊太利であるから、

クック社もこゝに見る處があ

つて、此の火山に登る電氣鐵道

山火噴スアピスエヴ





跡のイハシホ

惜しや中止となつて、如何にも残念であつた。間もなく電車に乗つて少し下り、或る料理店で晝食する。見渡せば地中海の波、靜かに蒼々として居る。灣の中央にアルコ子一島と、其れに續くキアプリー島が見ゆる。後の島には一大洞窟があるさうである。少憩後電車に乗つて麓に下り、亦馬車に乗つて行くと、今し走り過ぎた電車を追ふて、首尾能く其れに乗り込む。

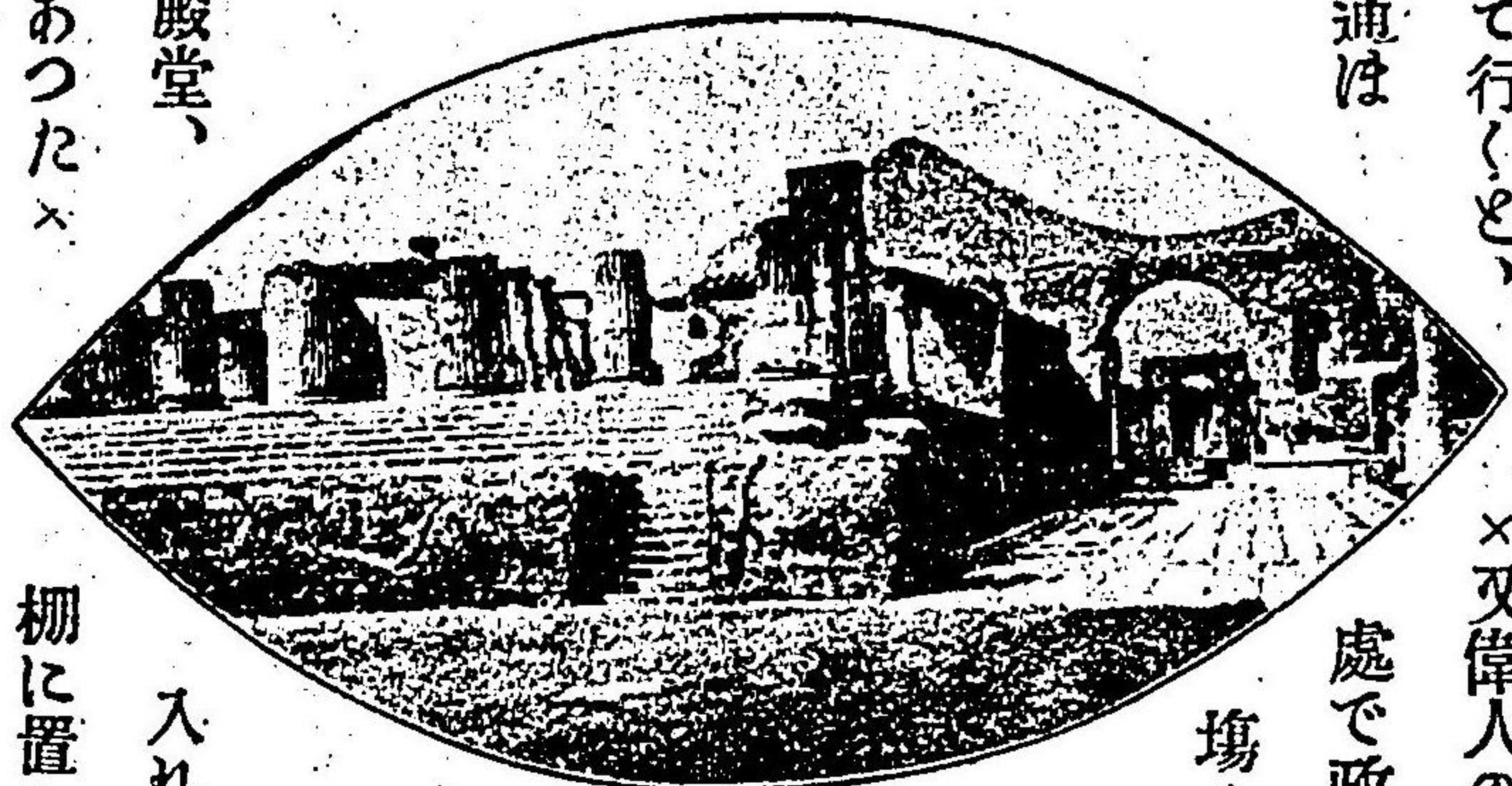
直ぐ下車し、切符買ふて、所謂ポンペイの跡に入る。ポンペイは今博物館のやうになつて居て縦覧の出来るやうになつて居る。我等の案内者は考古學者とやらで、能く説明して呉れる。ポ

ンペイは其の昔カムパニア洲ヴェスピアス山麓のサルノ川に沿へる、いとも繁華な都會であつた。紀元前六百年頃、希臘人の創建した所とやら、其の後羅馬に攻められて、其の傾分となつた。然るに紀元後七十九年の夜、突然ヴェスピアス山噴火して、三日二夜降り續けた溶岩や熱灰の爲めに、哀われや土中に埋つて終ふた。偶々十七世紀の頃発見されたのが、今のポンペイ市で、今盛んに伊太利政府の手で掘り出されて居る。人口は概略二萬程で、掘り出た骨が九百からあつたと云ふ。ノアの門、猿の川など云ふ所を通はる。店、雨戸、井戸などの跡がある。井戸は町々の角に、頑丈な石筒があつて、水を汲む時、手を掛けた跡らしいのが、あり、と其の石に擦り減らされて居る。此の井戸は掘り抜きでなく、鉛管を通はして、水道を引いたものである。酒屋、湯屋、酒屋は酒壺を置く跡、湯屋は湯槽の跡など残つて居る。その他洗濯屋、料理屋、麵麩屋などの跡がある。肉屋、石鹼屋、高利貸しの跡もある。次ぎに多くの貴人の邸宅を見たが大低家の作り方と、間取りが決つて居る。今でこそ天井が抜けて、からつとして居るが

其れでも昔は立派な邸であつた。前から見ると、屹度廣間に長方形の泉水があつて、其の縁には一個の彫像が置かれて居る。其處は昔アトリウムと云ふて、食堂とか、客間とか、休息場とかに使用されたのである。ソシテ其の両側には寢室の跡など並んで居る。風呂屋の跡、とは昔羅馬の其れのやうに、冷水浴、温湯浴、蒸氣浴などの設備があつて其の中央に運動場があつた。我等の歩く道は、今も尙敷石で疊んで、人道と車道と別れて居る。其の敷石の上に、車の轍の跡がちやんと窪んで居る。又道の角には飛石があつて、人道から人道へ渡るやうにしてある。或る貴人の邸宅を覗いたが、昔の色彩がさめない、綺麗な壁畫と、其れにモザイクの鮮やかな漆喰が残つて居る。お醫者の家、藥屋の家と云ふのがあつた。中に蛇の畫が書いてあるのは、藥屋の商標であると云ふ。女郎屋の跡と云ふのは、二階から招くやうに、欄干が前へ突き出て居る。ポンペイにはスタビア町と云ふ大通りがあつて、其れを中央に、左右へ幾多の町が通じて居るのである。我等は其れから東方へ歩を運ぶと、寺の跡がある。アイシスと云ふ神像の跡に穴があつて、其れから僧の通路がつけてある。其處で僧が祈禱すると、神さんのお告げがあつたと云ふ。更に東端へ出ると、二個の演劇場がある。一つは悲劇をやり、一つは喜劇をやつた跡だと云ふ。昔の芝居は野天でやつたので、舞臺を正面にして、半圓形に拵へた後高の看覽席で、三方を圍むたのである。樂屋の跡は棧敷の裏に残つて居る。顧みればグエスピアス山が瞭つきりと見えて、有るか無いかの煙むりを擧げて居る。あゝ昔は彼の煙むりで、此の市街を葬つたかと思ふと、實に不思議である。春の日の暮れ易く、秋の夜の短かきを啣ちしも、一たびグエスピアスの山怒つて、火を噴き出せば、戀も愛も將た虚榮心もあつたものかい、忽ち地の底に埋つて終ふた。げに其の時のあわて加減が思ひやられる。頭を巡らせば、東方にカステラ町が見ゆる。彼方にはモンテサンタン、デヨレー山などが聳いて、其の麓に海を見るのに、好風景なアマルチーと云ふ所がある。と云ふ。さて其處を去つて、南方へ行くと、ドリシヤン風の柱ばかりが立つて居る。更に西に向ひ、或る家の跡に入ると、骸骨が轉つて居た。是れは盗みに這入つたのだらう

と云ふ。噴水の跡など見て行くと、昔のナポリ風をした女が通はる。スタビア町を真直行くと、中央集會所であつたフォオラムの跡へ出て来る。此の邊はポンベいの最も繁盛した所であつて、四方に大分立派な圓柱が残つて居る。正面にはジヨーブの殿堂、西側にはアポロの殿堂があつた。

ヨアアの殿堂の跡



又偉人の銅像を置いた臺もあつた。昔は此處で政談演説もやれば、選挙もやる。又市場もあつた。其の賑やかさに連れて、市民が此の上もない、遊歩場處であつたと云ふ。其れから政廳、學校、裁判所などの跡など見て、或る陳列館に入る。此の中には窓、鍵、車、金庫、化石のやうになつた衣服、蠟燭臺、土灰にまみれた骸骨、窓ガラスの一部、動物の骨、臺所用具、燈心入れ、黒くなつたパン、玉子などが硝子棚に置かれて居る。最も多いのは酒甕であ

る。此の中に葡萄酒が一杯詰つて居たらうと思はれる。やがて其處を出ると、左側に坂がある。其の下は昔海に通じて居た所で、じやぶくと浪を打ちつけた所である。我等は右側を取つて北方に向ふ。アポロ神の寺、犠牲壇、是所にマキユリ商業神に牛を捧げた大理石の臺が残つて居る。市場、寺院、厭世詩人の家など見て、諸所見物して居ると、厭やな伊太利人が我等を取り圍みて、顔差し覗きに來る。僕はむかつぱら立つて、彼等の包圍から外に出た。かくて皆々後になり、先きになりつして、ポンベいの敗墟の跡を出で、圖ある料理店で、茶に牛乳交せ

遺物陳列館



て飯じ。間もなく電車に乗つて、ナポリに向ふ。思へばけふの見物は、夜遁げでもした空屋ばかりであつたが、委しい事は、何でもボンペイ丈でも、一札の本になつて居ると云ふ。

夜ホテルで食卓について居ると、二階の棧敷から三人程グアイオリン鳴らして、一人が聲高やかに歌ひ出す。日本のチヨンキナ節も一曲奏いた。食事終つて玄關に出ると、何んぢや音楽師がやつて来て、お錢頂戴！

ナポリ

●同四日 晴天

船附場＝頼もしい小學生徒＝博物館＝郊外の景＝海濱＝水族

館＝羅馬に向ふ

ナポリは船附場のことゝて、いと賑ふ街である。朝玄關先きに出て居ると、小學生徒が軍隊式に整列して、樂隊を先登に折し立てゝ行く。其の状いかにも規律があつて、沈着

いて居る。今の伊太利人こそ悪しけれ、頼もしいのは小學生徒である。未來の國家は是等小學生徒に依りて作られる。

馬車に乗つて、博物館へ行く。此處には希臘時代、羅馬時代の外に、彼のボンペイの遺物が置かれて居る。前者には―ジュピータ、海とナイル川の神、酒の祭りなどの彫刻、後者には―ローマの町を示した像、シーザ、歴代王の像最も可笑しかつたのは、大熊氏の顔がソークラテースの平らたい顔に酷似して居たから、皆大に笑ひ出した。プロミテオが人間を作る所(大石棺)、牛飼ひの戀、鱧を握みたる海神等(大彫刻)ボンペイには美の神グイナース、アポロ、足に羽生やした商業神マーキユリー、最も面白いのは、酒甕の上に酔倒せる酒の神、歴山王の戦争モザイク等。以上は大抵大理石の彫刻で技神に入れる嶄新な作ばかりである。最後に秘密室を見せられたが、是はボンペイの猥褻を示した物、婦人小兒の此の部室に入るを禁せられて居る。皆珍無類の部室であるとして打ち笑ひつ出づ。

さて馬車に乗つて、或る商店に立ち寄る。種々寶石を見せたが、伊太利商人の悪癖として、折し賣りするから、厭や氣さして、蒼皇遁げ出す。

午後は亦馬車に乗つて、水族館へ行く。案内者は、故さとナポリ郊外の景を見せる爲めに大廻はりする。山溪遠く延びて、棕櫚の樹蒼々繁つて居る。照りつくばかりの暑つさに堪へかねて、睡魔差し込むで、何うしても眼を開いて居られぬやうになり、傘に身を蔽ひて、白河夜船をやる。御者は馬に鞭を呉れて、車を走らす。聽て海濱に出ると、碧波濼々として漂ふて居る。彼方には、城壁を築いた島が見ゆる。如何にも明媚な氣色で彼の歐人の諺に、チープルスを見なければ死する能はずと云ふたのは、即ちこの事である。

馬車は水族館の前に停つたが、メレンダー君は先きに來て居る。中々珍らしい魚類も居たが、殊に珍らしかつたのは、電氣魚で、手に觸はると、ピリ、ツトさせる。間もなく出で、馬車に乗り、かへりは提徑を取つて、ナポリの街に入りホテルへ歸へる。

午後四時頃ホテルを去つて、ナポリ出發夜羅馬につき、お馴染みのホテルで一泊した。

●同五日 晴天 カザルタ城カザルタ城氣の利いた辨當辨當仿主の襲撃襲撃フロレンス着
けさ愈々羅馬出發フロレンスに向ふ。彼の練瓦の水道の跡など、覺束げに見ゆ。某驛からお城が見ゆる。其れはカザルタ城と云ふのである。汽車に食堂が無いから、ホテルから氣の利いた辨當を贈つたが、藁の籠に包むで、中にパン、ハム、オレンヂなど入れてあつた。黒衣に細帶しめたなまくら仿主が、部室へぞろぞろ這入つて來て、連りに英語で鎌田君と話す。否や早や仿主の襲撃を受けて、座はる席も狭まくなつて屏口した。夕方北方伊太利のフロレンスに着いた。

フロレンス (一)

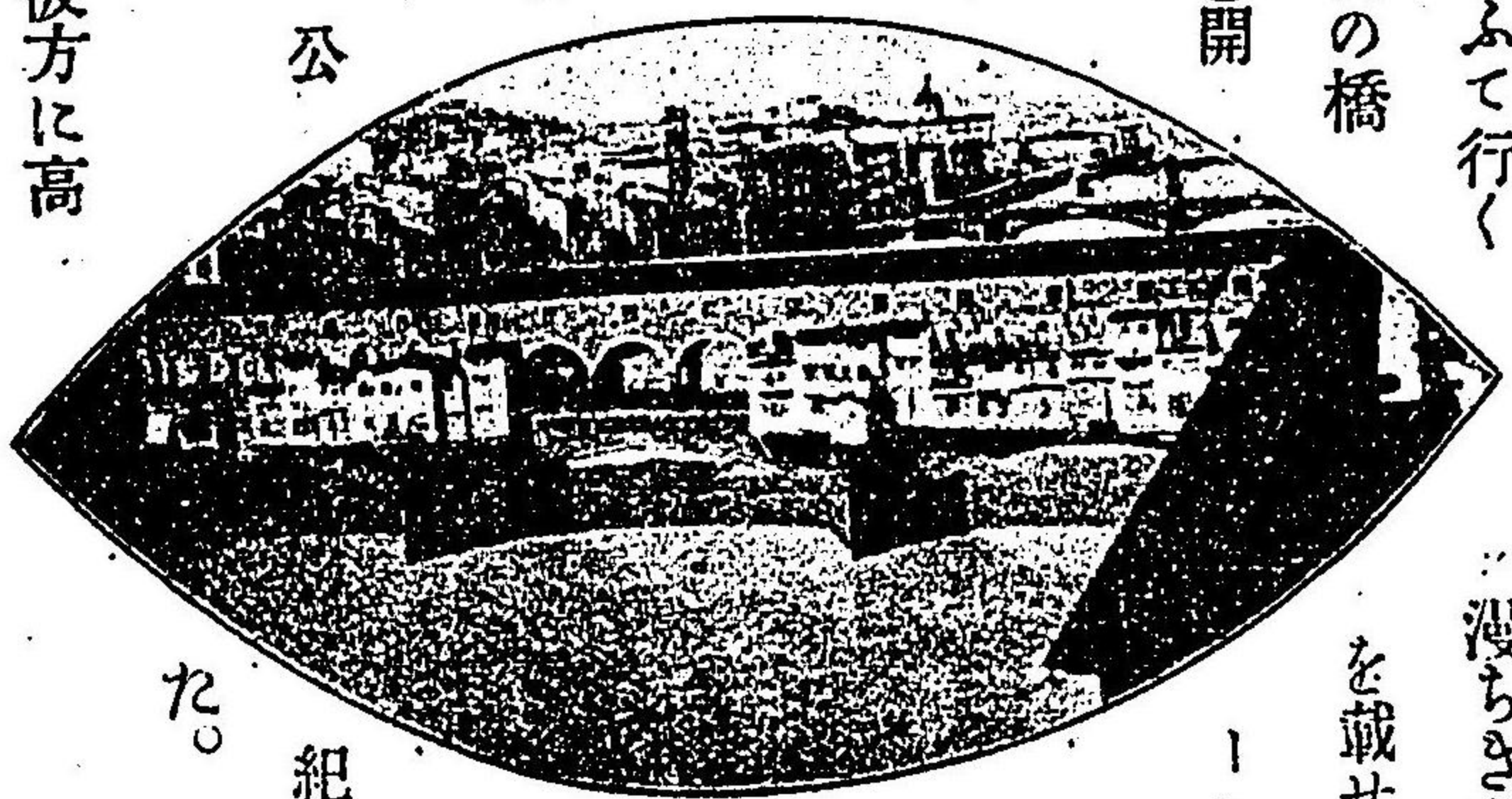
●同六日 晴天 サンクロス寺サンクロス寺丘上の眺望丘上の眺望廻廊の橋廻廊の橋公園公園食堂に犬食堂に犬風俗風俗優雅優雅寺の鐘寺の鐘

フロレンスは美術の叢淵で、歴史に能く聞いた事のある市街である。けさ馬車に乗つて、先づサン、クロス寺へ参詣した。此處にはミケランゼロ又はミカエル、アンゼロの墓、詩人ダンテの墓、ガリレオの墓などがある。ミケランゼロは十六世紀の文藝復興期に出た人で、建築、彫刻、繪畫を兼ねた稀世の天才である。ダンテは神曲の作を以て×



×有名である。ガリレオは天文學者である。此の三星とも、不思議にも此の地に生れたのである。此の寺院の前にダンテの銅像が立つて居る。ミケランゼロ丘からフロレンスを見ると、緑なす小丘に圍まれて、中世紀の儘なる家立ち並び、其の間に、圓塔高く聳ゆるあり、其の中に、細うアルノ川が流れて居る。如何にも美しい町で、恰度京都を小さくしたやうな氣色である。

坂を下り、橋を渡りて、川に沿ふて行く。廻廊の橋が架つて居る。此の橋上に、棟並びて、両側に商店を開いて居る。實に風變はりの橋である。けふは日曜の事として、有名な美術館を見る事出来ず、馬車は公園内をのり、印度親王の半身像の立てる前を通つて、森を中心に、公園を廻つて、歸途につく。晚餐の食卓について居ると、彼方に高



漫ちきな眼した女が、傍の椅子に犬を載せて、菜をくはして居る。フロレンスと云ふ所は、風俗の優雅な所である。町並みも綺麗だし、人情も宜し、宛るで南方伊太利と、柄が變つて來たやうに思はれる。ガングとお寺の鐘が喧ましい程打ち鳴らす。てうと中世紀の歐羅巴へ來たやうに思はれた。

(二)

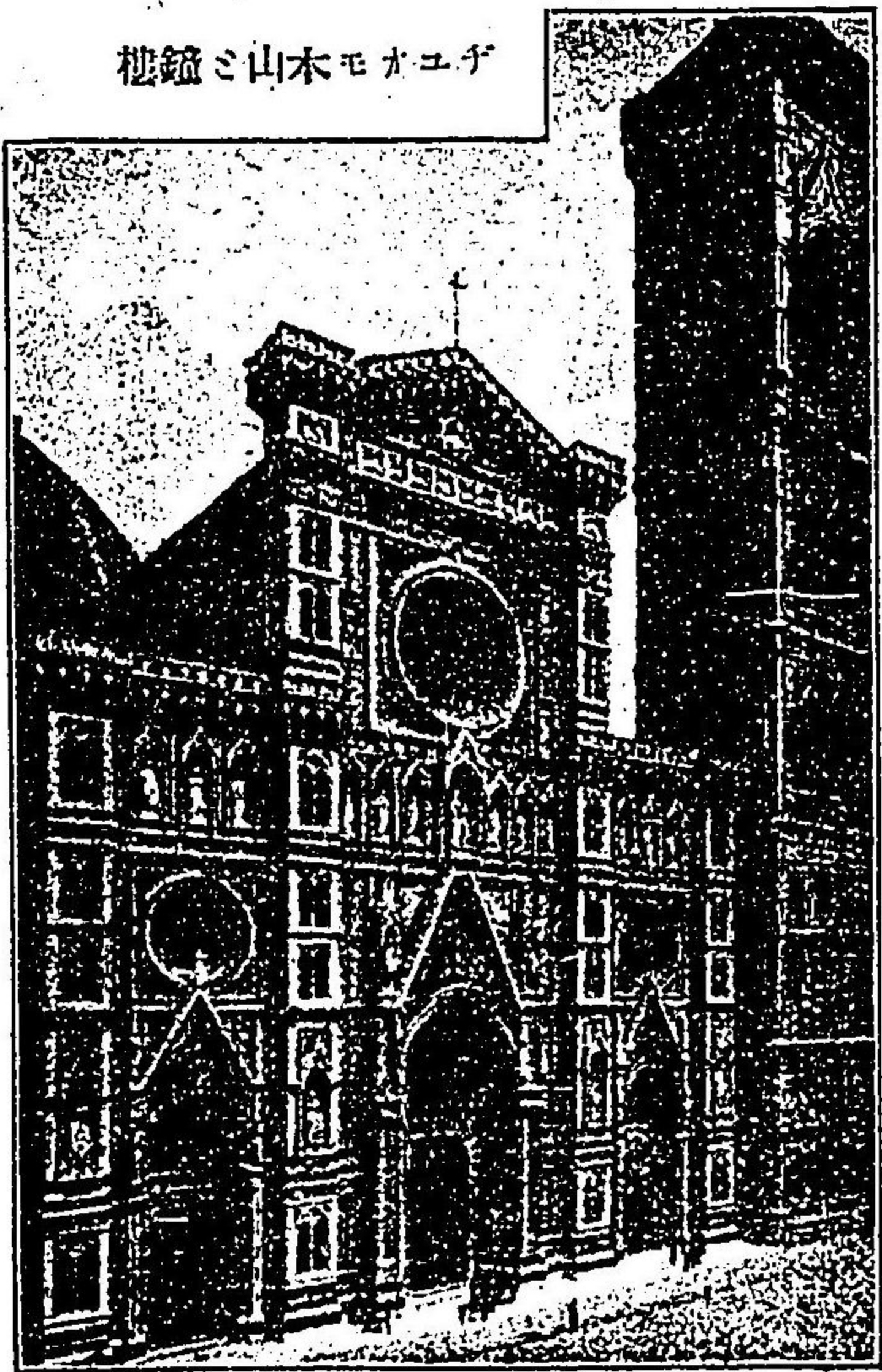
●同七日 雨天 獨立祭 軍隊の市街行進 市役所 デユオモ本山

けふは伊太利の獨立祭である。各戸に國旗を掲揚して、祝意を表して居る。朝メレンダ君に連れられて、電車から下りて行くと、けふの祭りに、軍隊の市街行進に出遇ふ。群衆の中に傘さして見て居たが、歩兵、騎兵、砲兵、自轉車隊と云ふ具合に、續々出て来る。中々軍紀が行き渡つて、勇氣があるやうに見えた。伊太利も此の軍隊があるので大に元氣を鼓舞するに足る。且つ彼の獨逸伊の三國同盟があるので、何うしても、是れ丈の軍隊が必要である。

アノル川に沿ふて、街に曲がり、メジシ町を通つて、ローラ僧が火刑にされた跡に出て来る。逐ひ傍に、市役所がある。十五世紀には、共和國として、政廳を置いた所で、今は市廳となつたが、當時の兩院の内、上院は市會議事堂となつた。此の建物は今も尙立派に保存されて居る。天井畫、壁畫など皆稀世の名畫である。此の中にピサとフロレンスとの戦争畫がある。是れを見て外に出ると、音楽隊が伊太利の國歌を奏して居た。

デユオモ本山は此の地第一の壯觀である。此處の洗禮堂は黑白二色の大理石より、建築されて居る。此の堂内に入つて見たが、赤坊が僧の洗禮を受けて居た。さて其處を出ると、向側に、圓塔形の大伽藍がある。其の左方に、高い長方形の鐘樓があつて、如何にも宏壯な大寺院である。堂内に入ると何物も飾つて居ないが、奥の方には、ミケランゼロの傑作、基督の臥像が置かれて居る。雨天の爲め、堂内暗けれど、上層の窓は七竇で鏤はめた畫像を透かして居る。抑々此の聖ローレンツオ寺院と響きの洗禮堂とは、有名なブル子リシーの設計に係つたもので、其建築家の如きは、彼のミケランゼロ

樓鐘ミ山木モオユヂ



の聖彼得寺院よりも優つた建築と評して居る。ミケランゼロさへ、曾つて人の其の埋葬地を問ふた時、吾をして永くブルチリシーの建築を冥想し得しむる處と云はしめた。以て如何に優秀な建築であるか、知られやう。やがて外に出ると、豪雨沛然として降つて來たから、姑らく入口に立つて居た。こゝの門扉は銅で、極めて緻密な彫刻を施して居る。漸やく雨が熄むたから、其處を去つて、歩いて、ホテルへ歸つた。

水のヴェニス (一)

ゴンドラ||ピアノの音||壯麗なホテル

晝フロレンス出發、夕方ヴェニスについて、河岸に出ると、兼ねて聞いて居た、ゴンドラに乗り込む。ゴンドラと云ふのは、此處の名物で、艦と艄が、ピンと撥ねた、乙字形の船である。ヴェニスは水上に建てる、最も不思議な町で、川を以て往來して居る。我等は此のけつたいな船に乗つて、紆ねく曲がつて行くと、古めかしい家屋が立ち並

びで居て、ガンくと鳴る寺の鐘、何所ともなしに聞こゆる、ピアノの音、何だか昔に返つたやうな氣になる。ゴンドラは廣い運河に出る。ホテルは彼れにやと云ふうちに、ダニエルホテルについて、直きに河岸から上つて、荷物も其處から上げる。此のホテルは、昔宮殿とやらで、さしも壯麗を極めて居る。

(二)

●同八日 晴天 地勢と沿革||セントマークス寺院||ドーヂ宮殿||ヴェニスの
全景||名士の住家||リアルト橋||硝子製造||夜の樂奏||波打
ち際||龍宮城

ヴェニスは原語で、ヴェネチヤと云ふて、本洲から、海上二哩も離れた一市街である。人口十五萬、大小三百七十八橋あると云ふ。此の地、伊太利半島の北西端にあつて、アドリアチツク海に臨む一開港場である。此の土地には、一頭の馬も居ないが、唯銅像の馬丈居るさうな。今より千年前の事とか、此處にヴェネチヤ共和國と云ふのがあつた。

其の頃のドーデがサラセン征伐をやつて、大に捷ち、今の土

耳古のコンスタンチノープルまでも、屬國にした

事がある。ドーデとは大統領と云ふ意味になると

云ふ。現時のドーデ宮殿は、其の時代の建築で、

以て如何に、美術の發達して居たか、知る事が出

来る。近世になつて、此の地にあつた小共和國が

奈翁に亡ぼされて、佛領となり、後亦埃領となり

逐ひに伊領となつた。

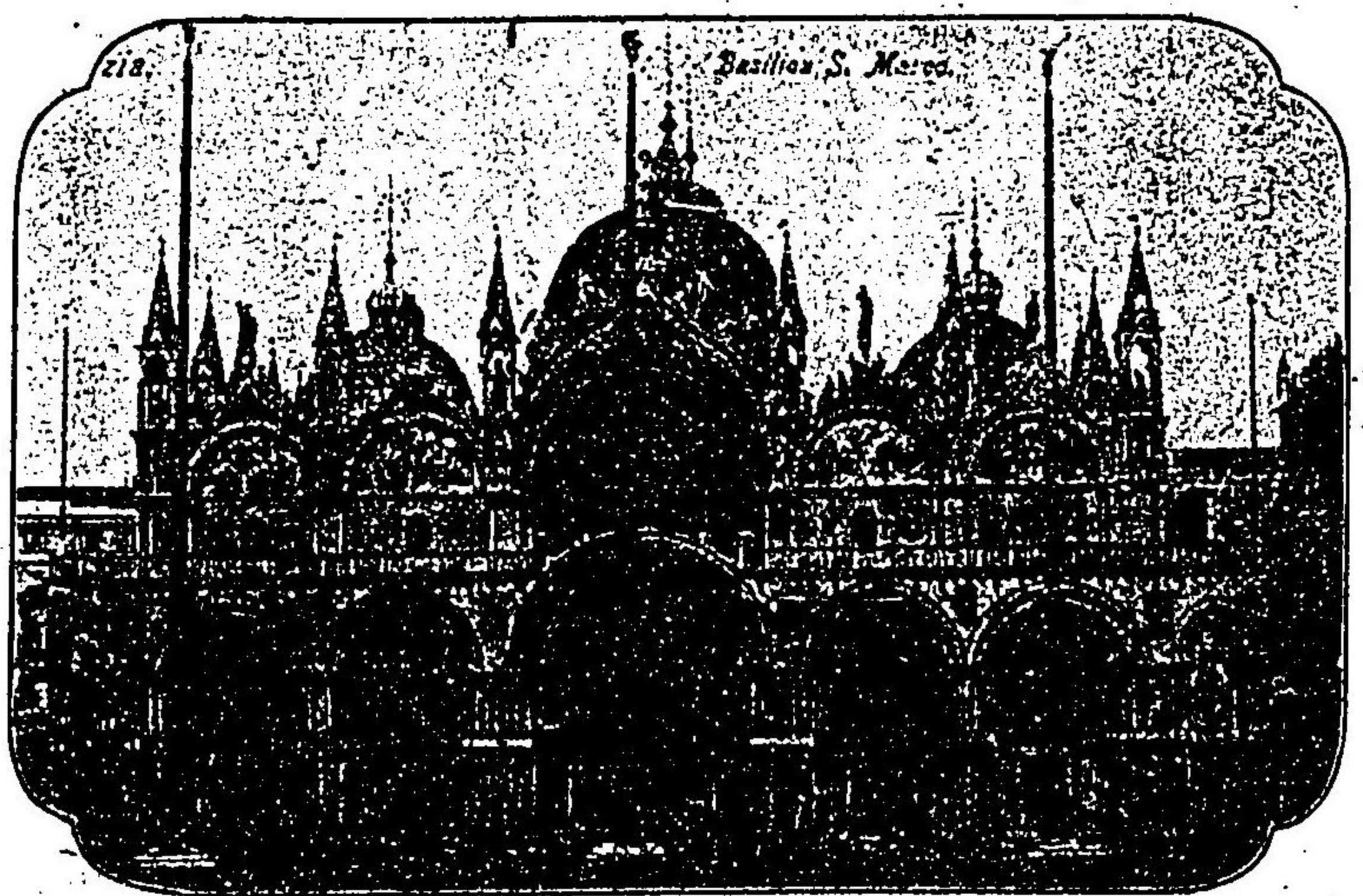
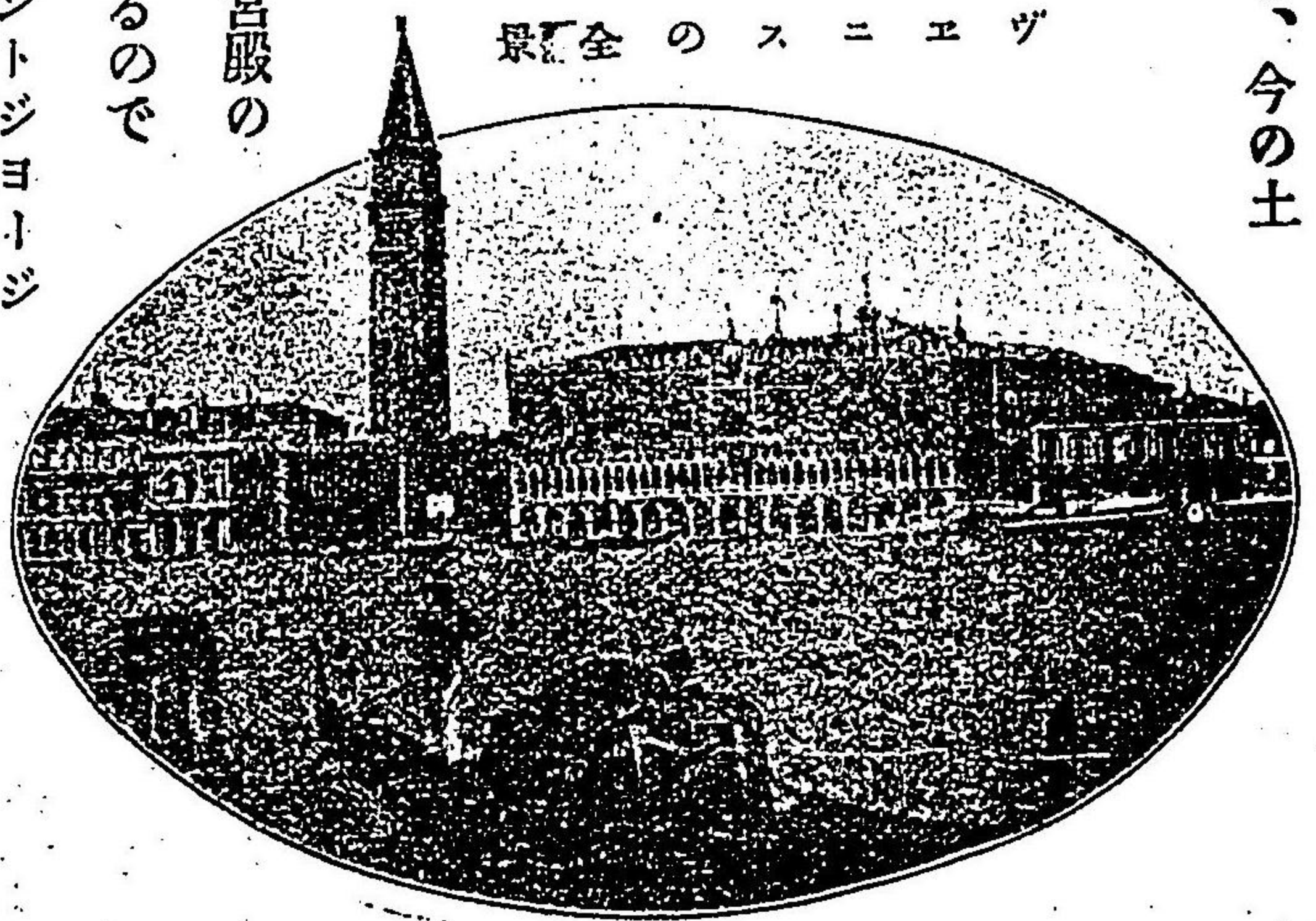
けさホテルを出て、石橋を渡ると、川の向ふに、

歎きの橋と云ふのが架つて居る。是は昔、ドーデ宮殿の

牢獄から、罪人が此の橋を渡ると、最う命が盡きるので

詩人バイロンが、歎きの橋と名づけたと云ふ。セントジョージ

景全のズニエヅ



院寺スリーマトンセ

の大通はりの前に、二本の柱梁があつて、其の上
上に羽生の獅子が立つて居る。此のライオンは
ヴェニス紋所である。此處らは一面に、石壁
みであつて、両側に宮殿がある。セントマー
ス寺院の前へ行く。玉蜀黍を買ふて撒く者あ
れば、無数の鳩が空を蔽ふて飛むで来る。

セントマークス寺は、紀元八百二十九年、ヴェ
ニスの商人が、埃及の歴山港から、セントマー
クスの聖像を盗んで來た。其れをドーデが祭る
爲めに、寺院を建立したのが創りで、後百年程
經つて焼けたから、更に再建したのが、現今の
寺院である。前より見れば、ゴシック式の建築

で、雲母石、蛇紋石、赤色大理石などの、多数の大圓柱に支へられ、アーチにモザイクで、セントマークスの一代記を描き、屋根に無數の彫刻を置けるなど、結構壯嚴得て形容し難い大寺院である。大理石柱は、土耳其から取つて來た物で、五百四十六本あると云ふ。アーチに入れば四個の銅馬がある。是れは子ロ帝のアーチにあつたのが、土都に行き、其れが土都から此處へ來て、奈翁佛に持ち行き、再び此處に歸つて來たものだと云ふ。アーチの柱と戸も土都から來た物である。寺院内に入れば、天井は金色のモザイクで、金光燦爛として輝いて居る。此處には、ヴェニスが東羅馬帝國征伐の時、持ち歸つて來た寶物、中々多いと云ふ事だ。天國の譽れと云ふ畫、基督の髻なき畫（是れはヴ市の特徴）、ビザンチンの塔エゲット石など最も珍である。奥の體拜堂は、三堂から成つて居て、本尊が中央で、左が守神で、右が聖晚餐の堂である。パーク大理石、サンスビー作十六世紀の戸彫、テッシヤン作天井など見て、僧衣更への室へ行く。こゝには十字架の聖像、徒弟の彫刻と木目の箒細工がある。こゝより本堂に歸へり、同寺院を出で、次ぎ

にドーヂ宮殿に入る。

ドーヂ宮殿は、最初は木材であつたが、中古から石材になつたと云ふ。此處の階段は金の階段と云はれて居る。サンスビー作、階梯の天井を見て控室に入る。應接室には、マルコピチエルー作信仰畫、外國の使臣の控室には、ヂュピター（歐羅巴と云ふ原名の起原）、拜謁室には、十六賢人の壁畫、儉約、質素、勤勉、幸福等を示した天井畫、次ぎの部室に入れば、天使降下の壁畫、天井の彫刻など眼につく。元老院會議室に入れば、十六人大統領の壇階がある。行政裁判所には、昔の訴狀箱が残つて居る。白狀室を見て、次ぎの大廣間に出づ。此處には、天國のさかぬを示した、ピントレット親子により描かれた、世界第一の廣大なる壁畫がある。天文と地球を示す渾圓球儀、バルバロサがポーギーに謝罪の壁畫、レバントの、ヴェニスと土耳其の戰爭畫など見て、地下室に下れば牢獄である。彼のバイロンが罪人の心持ちになつて立つたと云ふ、石牢にも這入つて見た。其れを出ると、其の邊から、例の歎きの橋が架つて居ると云ふ。あゝ上は玉を磨く

金殿玉樓でありながら、下は恐ろしい石造の獄舎であらうとは、昔の様を想ひ出でられ、誠に奇なる対象を感じた。かくて同宮殿を出づ。其れから裁縫學校へ行つて見たが、丁度レース織りをやつて居た。レースとは白糸で、刺繡をやるので、カーテンとか、テーブル掛けなどに用ゐる。女教師が手帛など見せて賣らうとしたが、何にも買はずに出て終ふた。

午後はゴンドラに乗つて沖に出る。船は二隻に分けたから、鎌田君は向ふから、聲掛けで通譯して呉れる。海上から、ヴェニス全景を見る。沖にはセントジョージの島が見ゆる。同島には、大寺院があつて、海から寺院の石壁を築き上げて居る。港には、米國の富豪モルガンのヨットが碇泊して居る。此のヨットに乗つて、世界旅行とは、何たる大盡やら、流石は、米國の富豪のやりさうな贅澤だ。

ゴンドラ船が運河を漕つて行くと、埃頓時代の鐵橋を過ぎる。沿岸の家屋は十四世紀頃の物多く、殊に十一世紀頃の古い物まで残つて居る。折りおり、巡航船が波を擧げて我

等を越して行く。こゝに不思議な

のは、巡航船の繫留場が大阪の

其れとちつとも變はりない。

バイロンがチャイルドハロ

ルドを作つた家、ロンバル

ジと云ふ建築家の建てし

家、モリス作十一世紀の建

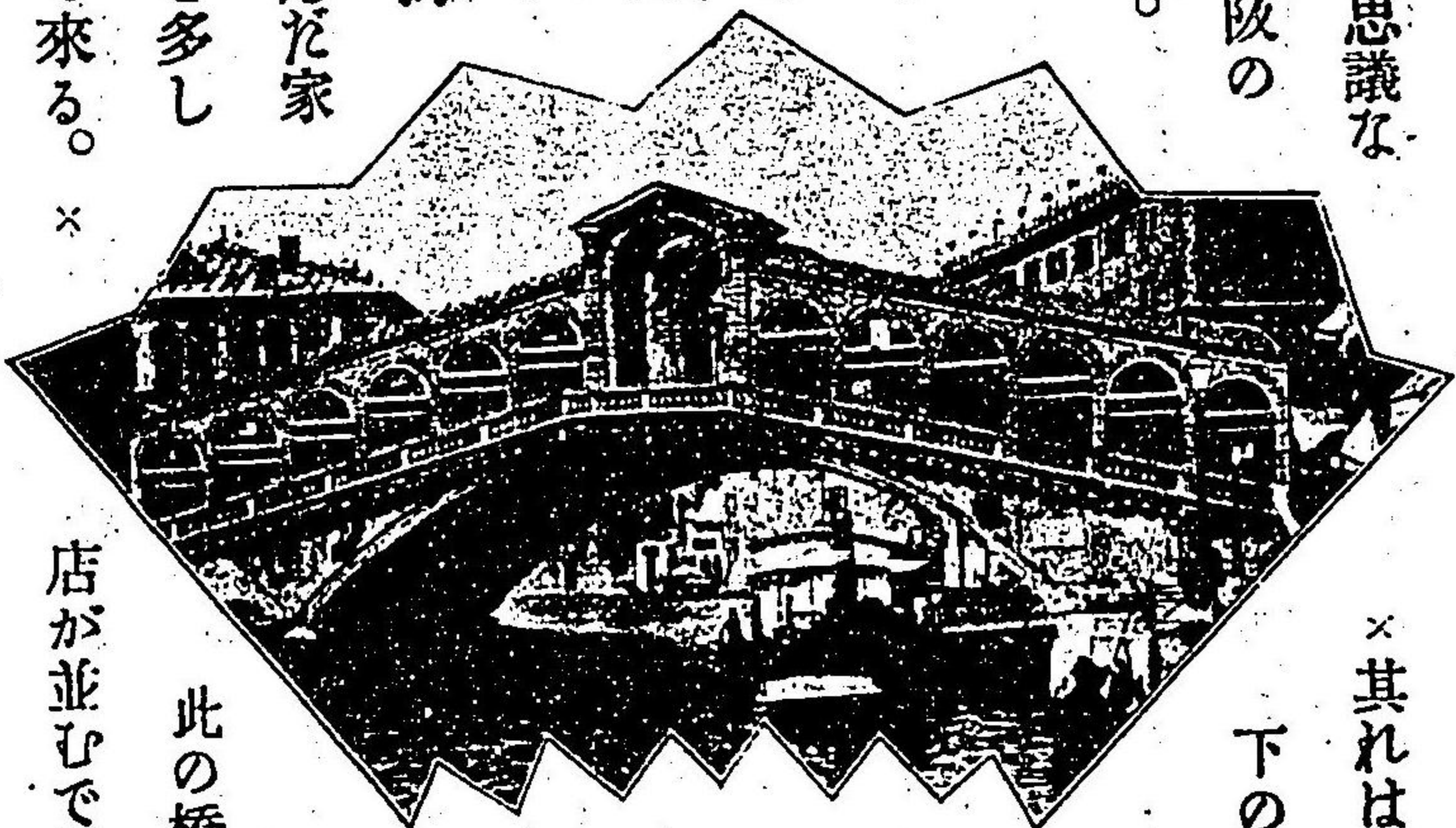
築、(窓が細うて、柱の多い

のが特徴)、伊太利銀行、獨

逸の音楽家ワグネルの死んだ家

など、名士の住んだ家いと多し

其の中奇妙な橋が近づいて来る。*



*其れは眼鏡式の石橋の上に、長い廊

下の屋根を渡した橋である。其の

名はリアルト橋と云ふて、沙

翁が「ヴェニスの商人」

と云ふ戯曲中に入れた橋

である。案内者曰く、沙

翁はヴェニスへ來なかつ

たが、彼れの筆に載つて

此の橋益々有名になつた

と云ふ。我等は上陸して

此の橋上を渡つて見る。両側に小賣

店が並んで居る。彼の人肉裁判の、猶太

人シャイロックの住むで居たと云ふ家は、彼れだと指す。蓋し作者の作つた人物を、後世の人が物好きに、却手に斯く云ふのであらうと思はれた。少し町を歩いて、川端に下り、亦ゴンドラに乗つて、街路なる川を紆ねくと廻はる。兵營、墓地などの間を通つて、大運河に出る。海上遠く電線を渡して居る。再び川に入り、紆ねくと廻つて、日本名譽領事館の前を通はる。歸途、ヴェニス名物の硝子製造會社に立寄る。

最初にモザイクの細工を見る。硝子の細片を摘むで、セメンの型に填めるのである。抑々モザイクは歐洲美術の一種で、殊に伊太利が本場所である。其れに硝子はヴェニスの特産で、彼の繪ガラスは此の地から出るのである。我等硝子器具の陳列品を見て廻はる僕は花瓶一個と、コップ一組を買ひ、萩原君は茶道具一式購めた。茲に驚くのは、商人の掛値の酷い事である。最う要らぬと云ふのに、買へくと色々の物を出して來る伊太利商人の癖の惡るい事、實に甚しい。僕は日本へ送るやうに、鎌田君に頼むだ。かくて同店を出で、亦ゴンドラに乗つて、ホテル前に歸へる。

夜は大熊君と二人散歩に出で、セントジョージの大通はりで、音樂の大合奏を聞く。樂が終はると、拍手掲采である。無數の各國の遊覽客が、多數のテーブルに依つて、酒を飲むで居る。謂は、歐洲の一大娛樂地である。二人はホテルへ歸へる時、波打ち際の石階に腰掛けると、がぶる波に驚いて、亦上の石に腰を下ろす。宛るで、西洋の龍宮城へ來たやうな心地になる。燈影かすかに、船のマストにちらつく。

(三)

同九日 晴天 切符で悶着 遊覽地の惡癖 夜の食堂 赤い鉢巻き
けさ大熊君と、萩原君と三人で、ヴェニスから離れた一公園に遊ぶ、不圖知らんと、美術館の庭に這入つて、ベンチに掛けて居ると、看守がやつて來て、何にやら喋べるけれど、言語不通で、薩張り解らぬ。宜い加減にして置けと思ふて、遁げて行くと、巡查を連れて、追つかけて來る。切符の錢を拂へと云ふ事だと解つて、改札口へ行つて、切符を買ふた。巡查は笑ふて、挨拶して去つた。已むを得ず美術館へ這入つて見た。

午後、亦ろセントジョージに出掛けて、物を買はふとすれば、折しつげに賣らうとす折角買ひたいものも、腹立つて買はずに歸つた。遊覽客の多い所は、偶々土民の乞食心を助けて、一錢でも多く貪らんとする。立派な商家の旦那まで、乞食見たいに、折し賣りしやうとする。旅客は委しく見るに堪へないで、匆々にして、遁げ出す。外人と云ふものは、何にも事情に通じないと思ふて居るか知らんが、決して左うでない。却手能く知つて居る者である。實に遊覽地程、風俗を悪くするものはないと思ふた。日本でも箱根、日光、京都、奈良の如きも同じだと思ふ。

夜の食堂又なく美し。電燈の光、晝もあざむくばかり明るい。多數の外人が何にやら喋々としゃべつて居る。殊に可笑しかつたのは、俳優らしい女が、赤い鉢巻きして這入つて來た。

第六編 北歐日記

伊太利出發

●同十日 晴天 有明の月||朝のヴェニス||深山幽谷||形勢一變||維納著||

五色の墳水

いよ／＼伊太利も、ヴェニスでお名残り、けさ埃太利へ出發する。午前四時といふに、ホテルの勝手口から、ゴンドラに乗つて、沖へと出る。曉きの空に、有明の月が懸つては、い／＼とした波の上……陸の方はと見れば、高塔樓閣未だ夢の中にあり。あゝ旅へ出てから、けさ見たいな景は初めてだ。ゴンドラがヴェニスの川を行く時、ピチャ／＼と打つ波の音靜かに、リアルト橋を見納めに、過ぎゆけば、圓穹の空にさまよふ燕の、十字架を取り巻く其の聲は、昔も今も變はりない。ゆる／＼ゆると、ゆるめく、川の波や

午前五時頃、汽車に乗らうとすると、豫約の箱に、獨逸人夫婦が乗つちまふた。スルト我がメレンダー君が酷く怒つて、驛夫を責め此所は日本人の箱であるとして、獨逸人を追ひ出す。三人はぶつ／＼ばやいて出て行く、メレンダー君はけふ大に振つた。五時半頃出發。海上の架橋を渡る。

汽車はアルプス山脈に差しかゝる。靈山奇峰面を歴して迫り、懸河渺々帯の如く瑩々る實に人目を眩するばかりである。げに歐洲第一の大山脈である。山を横斷し、埃領に入り、税關の檢査を受けて、他の汽車に乗り換へを爲す。形勢一變、伊太利の鮮へなき景と、埃太利の緑こきと何れか心地よき。列車の塵多きと、清潔なると何れかよき。あゝ一國の差を以て、是れ丈變つて來る。午後九時首府維納についた。馬車を驅つて、ガタ／＼ンゴトン揺られながら行くと、五色の大噴水、虹の如く、熾んに噴き上げて居た。

維納 (一)

●同十一日 雨天 模範的道路 釘の本 セントカノー寺 御墳墓 心臟を祭る 博物館 シュンブルグ宮殿

馬車二臺並べて、維納の街を通る。維納の道路は六筋からあつて、人道、車道、電車と云ふ具合に分け、且つ電車は両側に附いて居て、二つに離れて居る。此くの如く道路の整頓して居る事は、歐洲第一と云ふ事である。維納を以て、小巴里と云ふのは、全く美しい都會であるからである。ダニューブ川が、此の市街の眞中に流れて居る。或る街角の家の前に立つた。其の家の柱に、一杯釘を打ちつけた木がある。案内者云ふ或る小僧が一美人に戀したが、堅き鍵を發明したら、娘をやるこのことに、一生懸命になつて、遂うと端づれない鍵を作つて、此の木に掛けた。親も其の熱心に感じて、娘を彼れにやつたと云ふ。其れが因となつて、其の後、多くの人が、縁結びにとて、此の木

に、多くの釘を打ちつけたのである。我等此の話に、ぼんやりして居ると、小供等がいといぶかしげた、我等を取り圍みて、覗いて居る。いとおかし。

今度は、馬車はお寺の前に停る。亦お寺がと不平云ひしも適はず、お寺に、皆美術が集つて居るのだから、已むを得ない。寺の名は、セントカノー寺と云ふて、四百年前の建築で、カトリック教だと云ふ。脱帽して、寺院に入れば、薄す暗くて、何物も見えないが、唯奥の禮拜堂の邊りに、蠟燭の燈がぼか／＼燃えて居る。

寺を出て、馬車を驛り、皇室の御墳墓へ行く。此處には、マリアテレサ、其の乳母、ジョセフ二世、十六人の皇子、奈翁夫人マリヤリス等の墓がある。我等は亦馬車を驛つて、今聯隊になつて居る、宮城内に入る。折りしも歩哨の交代に、樂隊離して、一小隊を率ゐ來たる。我等は群衆の注目を惹いて居たが、ガイダーが宮城拜觀の切符購賣の爲め、長い間待たされた。

其れからオーガスチン寺を訪ふ。此處には有名な彫刻家カノーバ作の墳塋がある。又最も不思議なのは、皇帝の心臓を取つて、此處へ珍藏して置く。同寺院の前に、ジョセフ二世の銅像がある。次ぎに博物館を訪ふ。

此處にも、埃及物、ローマ、イタリー、ポンペイの物など飾つて居る。外にボヘミヤの硝子、武器、石撥き銃など……

午後は聯隊になつて居る宮殿の一部、拜觀出來た。埃土戦争の布畫。石のはめゑ、三年間の時計、皇帝即位の時、油を足に塗られた部室、獨逸皇帝の泊つた時、直接伯林政府と交換された、卓上電話器を添へ附けた部室を見た。さて其處を出て、更に馬車を馳せて、離宮美泉宮へ行く、輪奐の美、宏壯な建築さすがに見上げた物だ。今フランツヨセフ老皇帝居給ふ由にて、拜觀許されず。されど御庭だけ拜觀出來た。噴水の大、林泉の配置、整然として清爽を極む。動物館に出た時、驟雨颯つと降つて來た。やがて馬車に乗つて、幌下ろしてホテルに歸へる。

(二)

●同十二日 晴天

金剛石劇場 繪畫展覽

會 プラタスキア公園

朝馬車に乗つて、きなふ訪ひし宮殿へと行つた。

二階へ通つて、珍貴な寶物を見る。黄金の王冠、

即位式に用ゆる眞珠の袈紗、大青貝、金剛石の勳

章、奈翁一世のマント等であつた。きら／＼光る

金剛石の前に、多数の婦人、蟻の如くばた／＼と

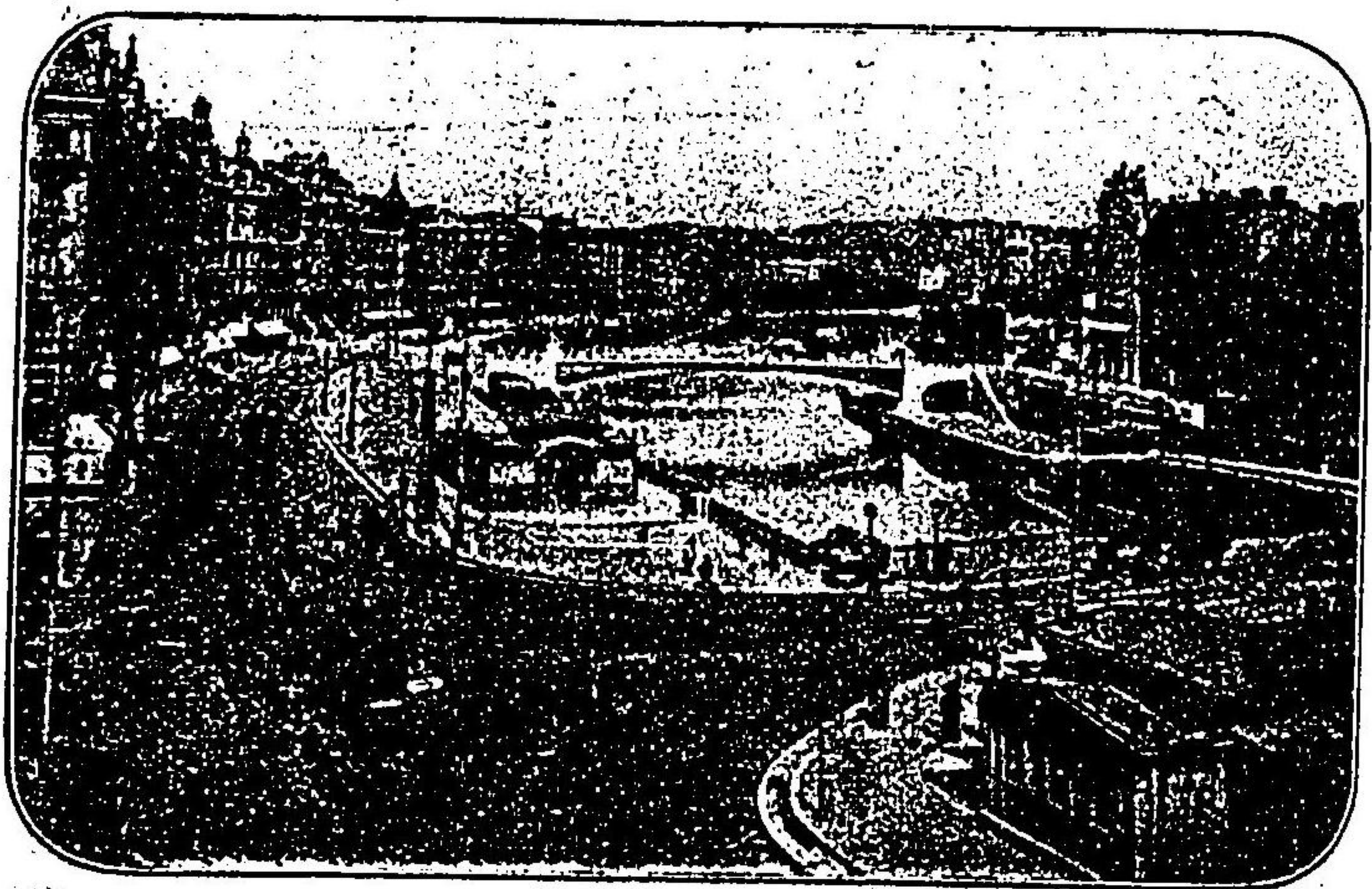
取り巻いた。是れを見て、歐洲の婦人が、如何に

貴金屬、寶石類に渴望して居るかを知つた。見物

人中に、印度の一青年が居て、連りに鎌田君と話

す。歐洲でピアノの一番宜い所は維納なれど、獨

逸語が出来ぬ爲め、矢張り英國へ行くと云ふて居



維納のプラタスキア公園

たさうな。王宮から出ても、此の青年は懐つがしがりて、グッドバイを以て我等と訣れた。

此處の有名な劇場を訪ふた。舞臺から機敷、化粧室、樂屋など、悉く見せて呉れる。巴里のオペラ座から見ると、おちるけれど、中々立派なシートルであつた。殊に感じたのは、舞臺下の仕掛けである。セリ上りの器械やら、波を起こす爲めに、空氣を送るポンプなど仕掛けてあつた。

午後は繪畫展覽會へ行つた。歸途プラタスキア公園内を走る。車上睡魔に襲はる。中にグウグウ寝た人もある。圖ある公園のビーヤホールに一杯飲む。

●同十三日 晴天

一寸坊師 汽車が家 波ヘミヤの野 山伏の話 エルベ

の流れ 獨逸に入る ドレスデン着

維納も僅か二日で去り、けふは漸よく獨逸へ向ふ。この停車場で、眼につくのは、奇妙に一寸坊師の多い事だ。汽車から汽車に移つる旅び、我等は此の三月の間、汽車を

家にして居る。正直な事云ふと、眞とに汽車も厭やになつたよ！茫々たるボヘミヤの野高低起伏、至る處波打てる丘陵、山を爲し、蔚乎たる森其の上を蔽ふ。鎌田君云ふ、彼の蘇格蘭の山で見た山伏は、元此のボヘミヤから來た事で、今も尙此の地には家を持たず、唯山に移り住む山伏の一家があるさうな。萬目唯蒼々たる野に、獨逸に注ぐ、エルベの流れが、滾々として溢れて居る。夕方獨逸の國境に入る。寛大な税關の取調べを受けて、他の汽車に乗り換へる。其のうち、サクソニアのドレスデンに到着した。

ドレスデン (一)

●同十四日 晴天 サクソニア宮—エルベ河—美術館—陶器陳列場—アルバ

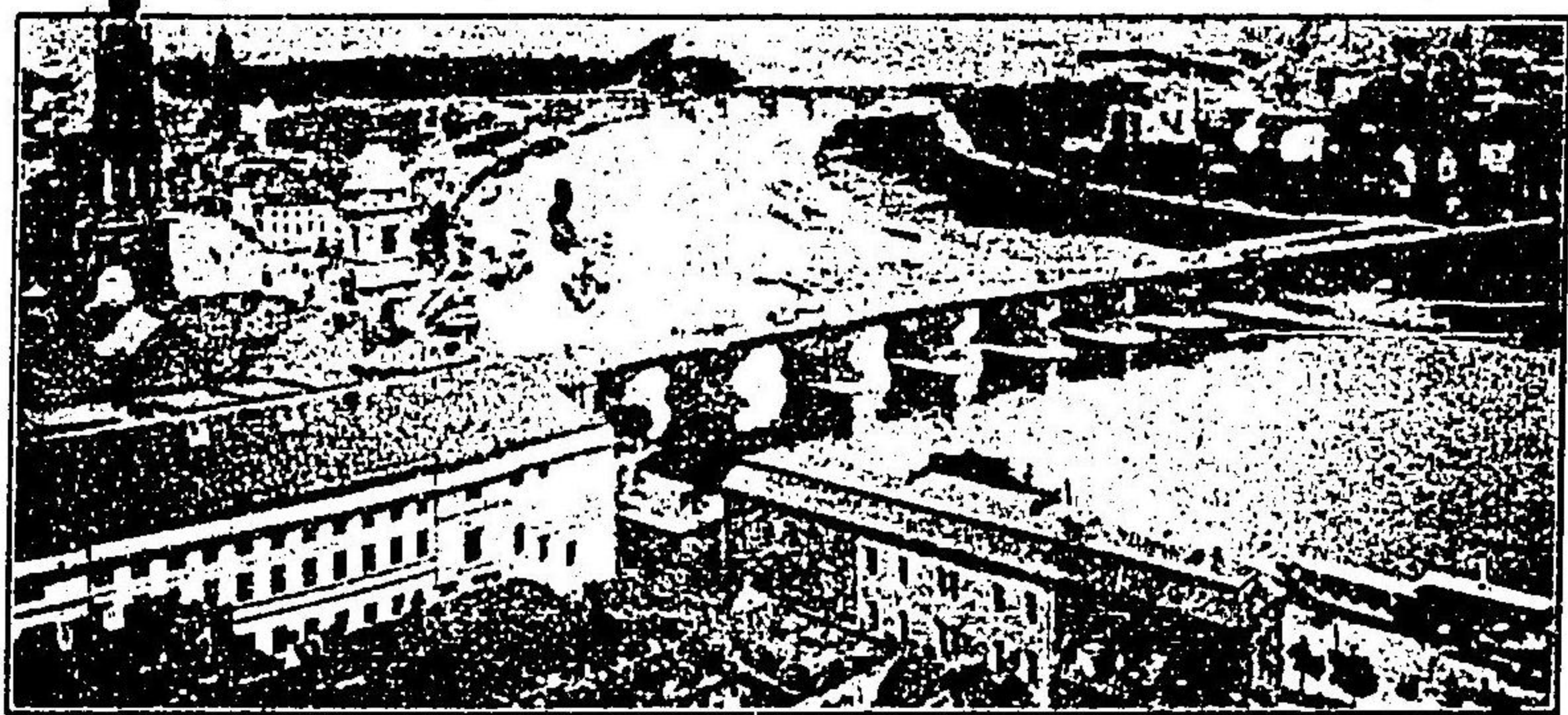
—ト大公園—獨逸人の氣風

朝一寸電車に乗つて下り、或るスクエアに立つと、カトリックの寺院と、サクソニアの王宮が聳ひて居る。獨逸と云ふ國柄は、御好知の如く聯邦國で、サクソニアは南獨逸の

一王國である。其の王さんが、此處に住むで居るのである。我等は徒歩で、王宮の屋根の上へ出ると、御庭が見ゆる。其處へ下りて行くと、カルマリア音楽家、サクソニア王オーガスタンの銅像がある。我等は歩を返へして、王宮の門から這入ると、嚴めしい歩哨が立つて居る。例に依り拜觀を許されたが、實に珍らしい寶物が多かつた。馬上のオーガスタン、アポロが足洗はす處、馬上のルキ十四世等の銅像、一つの象牙船、四千マークの皿、花細工の石机、鷲鳥の卵、鳥形の鍋、殊に妙なのは、酒を飲む皿にした、金製の獅子、馬、家などがある。金の皿、金の葡萄酒入れ、四千マークの貝細工、親王初めて世に出で、善人を連れて、門前に、惡人を逐ふと云ふ事を諷した大理石の彫刻、又最も面白いのは、球時計で、玉が塔の上から、クル〜と廻ふてまはつて、カッソと穴に落ち込むと、一分間の経過を示す。間もなく玉が口から現はれる。水晶器、楯、金婚式に用ゐた道具、寶石入れの王冠、金剛石勳章、釧、縷止め、頸飾り、王宮の模型は十七人の者八年かゝつて作つた物、各兵種の勤務を示した模擬銅は、金婚式の祝典に献上

せし物である。此の王宮内は鏡
で張り詰めてある。

國會議事堂の前を通ほる。此の
議會で決議した事を、更に伯林
の議會に附するのである。エル
ベ河を渡ると、彼岸に大藏省と
文部省が見ゆ、川を見れば溶々
たる流れ盡さず。其の中に、ボ
ヘミヤと漢堡との間に、ケーブ
ル船が通ふて居る。沿岸を運ふ
て、丘上に隣り、氣色を賞して
行くと、緑機やかな、木の下



河ベルエニ市ンテスレド

二百三十四
影に、テーブルを置き渡
したる、何とも云へぬ、
風流なビーヤホールであ
る。
美術館に立ち寄る。此の
中には、無数の石膏のみ
並べて居る。戯曲ドラマを示し
た彫刻、凱旋、鷲鳥を盜
む(木彫り)、コアカ日本
少女(金屬)、音楽家シヨ
ツパン像、宗教改革首唱
者マルチンルーテルの像

等々と珍らし。

次ぎに陶器陳列場に寄る。林檎を描いた皿、水泉模様の花瓶、奈翁一世の大花瓶、サク
ソニアの皿(黄色)、憎らしきは日本陶器の模造品……

午後は馬車で、アルバート大公園に入る。栗の花白く咲き、緑樹蔚蒼として、一大森林
を爲す。或る丘上の坂を下ると、ドレスデン市の全景一眼に見ゆる。エルベに架かる妙
な鐵橋を渡る。婦人病院の前を通ほり、七年前博覽會のあつた、王室に屬する大公園に
入れば、なみくした池、樹下の酒保、紅紫燃ゆる草花など、憎くさもにくし。

棕十君の朋友某醫士の談を聞くに、獨逸人は勤勉力行の國民であると云ふ。

(二)

●十五日 晴天

ドレスデンは好い處 散歩 珍らしい玩具 自動ビーヤ 巧妙な模造品 伯林に向ふ 最大急行列車

僕は、ドレスデンは詰らぬ所と聞いて居たのに、來て見れば、案に相違、市街の般盛な

事、公園の大ど、風景美と兼ねて、實に立派な都會である。僕は、けさ大熊さんと、二人で、ドレスデン市を散歩した。繪葉書などあさり行くと、ふとメレンダー君と出遇ひ大に笑ふて過ぎる。花賣りの間を過ぎて、後戻りし、圖ある玩具屋で、チエツペリン式の空中飛行器の玩具を買ふ。歐洲では今此の玩具が大流行だ。街を歩いて行くと彼の費府にあつた自動食店のやうな、ビーヤホールがあつたから、一寸一杯飲む。商店の飾付けを見て行くと、日本の商品が陳列されて居るから、能く注意すると、是は日本製でなく、皆獨逸製であると、大熊さん云ふ。漆器と云ひ、提灯と云ひ、陶器と云ひ、圓切り日本製のやうに見ゆる。否却つて日本のよりも巧妙なのがある。何んど、獨逸人は這處に狡猾なんだらう。

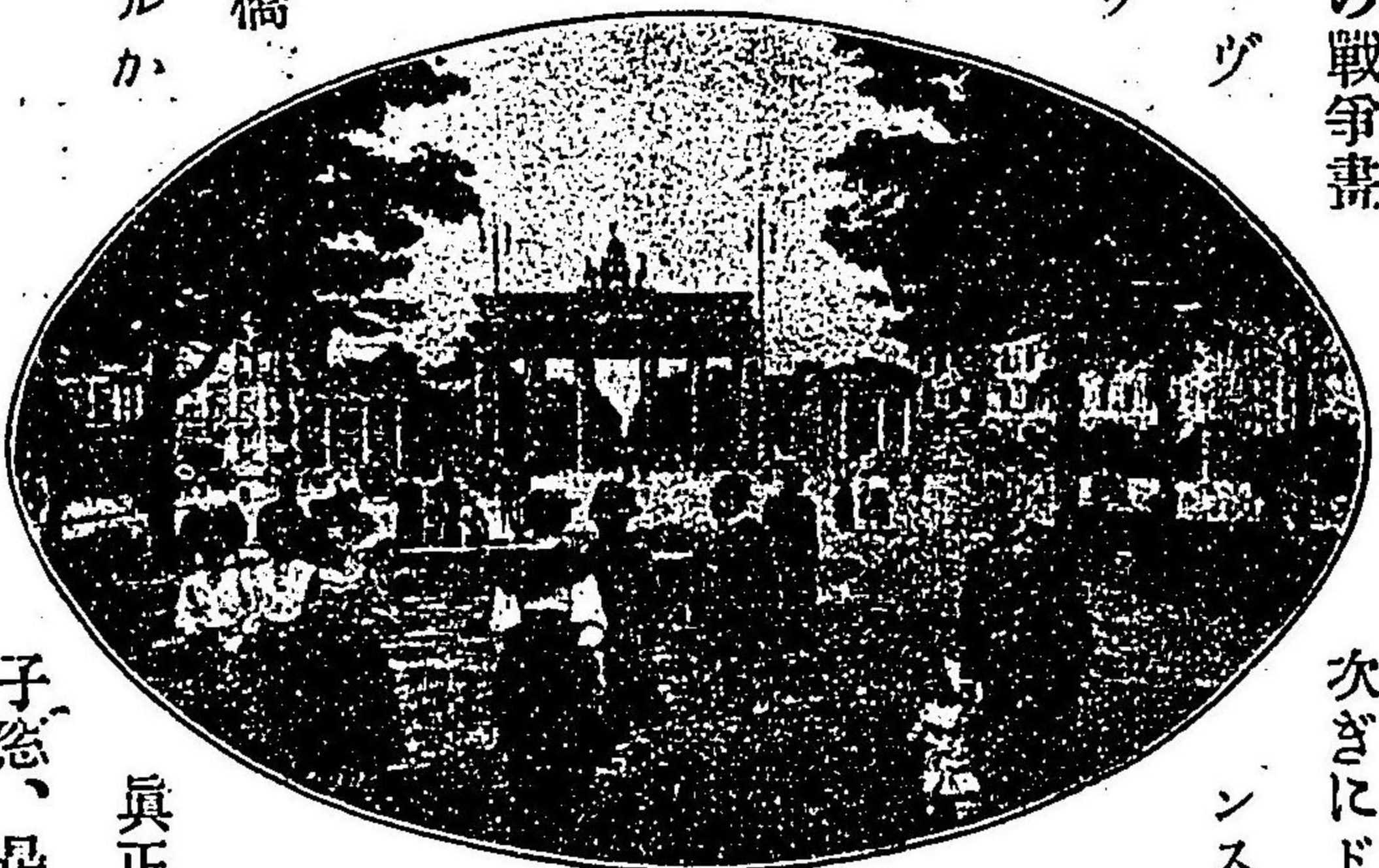
午後ドレスデン出發、愈々楽しい伯林に向ふ。ブランデンブルグの大平原、一點遮へざる物もなく、地平線まで透き通つて見ゆる。然かも此の汽車は最大急行で、一個所も停らず、伯林まで直行した。夕刻伯林著。多くの日本人の出迎ひを受けた。

伯 林 (二)

日本俱樂部 || ビーヤホール || 夜の菩提樹街 ウンテルリンデン街

日本俱樂部の招待を受けて、皆行く。日本俱樂部と云へば、苟も伯林に、一度足を入れる者は、學生と云はず、商人と云はず、軍人と云はず、必ず訪ふ所である。主人は東氏と云ひ、福岡縣の人で、早くから此處へ來て、日本料理店を開いて、成效した人である。蓋し東氏のやうに、自ら停車場まで出迎ひして、招待し、萬事日本人の世話を焼かれる親切な人は尠ない。同俱樂部には、玉突臺と、圖書館の添へがある。我等は久しぶりで日本料理の饗應を受けた。牛肉の透鍋、吸物、肴、ビーヤなど出で、實に旨かつた。此の味は、他境にある者でなくては、解らない。透鍋の道具が、又氣が利いて居て、鍋と酒精ランプが各自に渡る。皆却手に、鍋の下へ燈を送つて、肉にとつさり醬油をつくと、忽ち煮ゆる。其れに獨逸の名物、ビーヤを飲むでやるのだから、何に譯ないさ。食

ボーヘン、フリエデブルグの戦争畫
 フリ王將軍の死を訪ふ畫、ゾ
 エルサイユ宮内の光景、ボツ
 ダム城内に於けるフリ王臨
 終の畫白室ホワイトルーム（三百人の饗應
 室）、英ヴィクトリア女王、
 露の歴山王の肖像畫、禮拜
 堂（オルガン無し）、基督十
 字架の置物等。見終つて、
 階梯を下るに、螺旋形の段橋
 で、高さ實に七十六メートルか
 らある。



次ぎにドム寺院に參詣した。ル子ザ

ンス式の大建築圓塔高く聳ゆ、
 石階重疊せる上に、ドーリ
 ア式の大圓柱巍然とし
 て立つ。倫敦や羅馬と
 違ひ、寺院の建築新し
 く寺院内に入れば、光
 線の疏通能く、全体に
 明るい。無數の机、規
 律正しく、整列して居る。

街ンデンリルデンウ

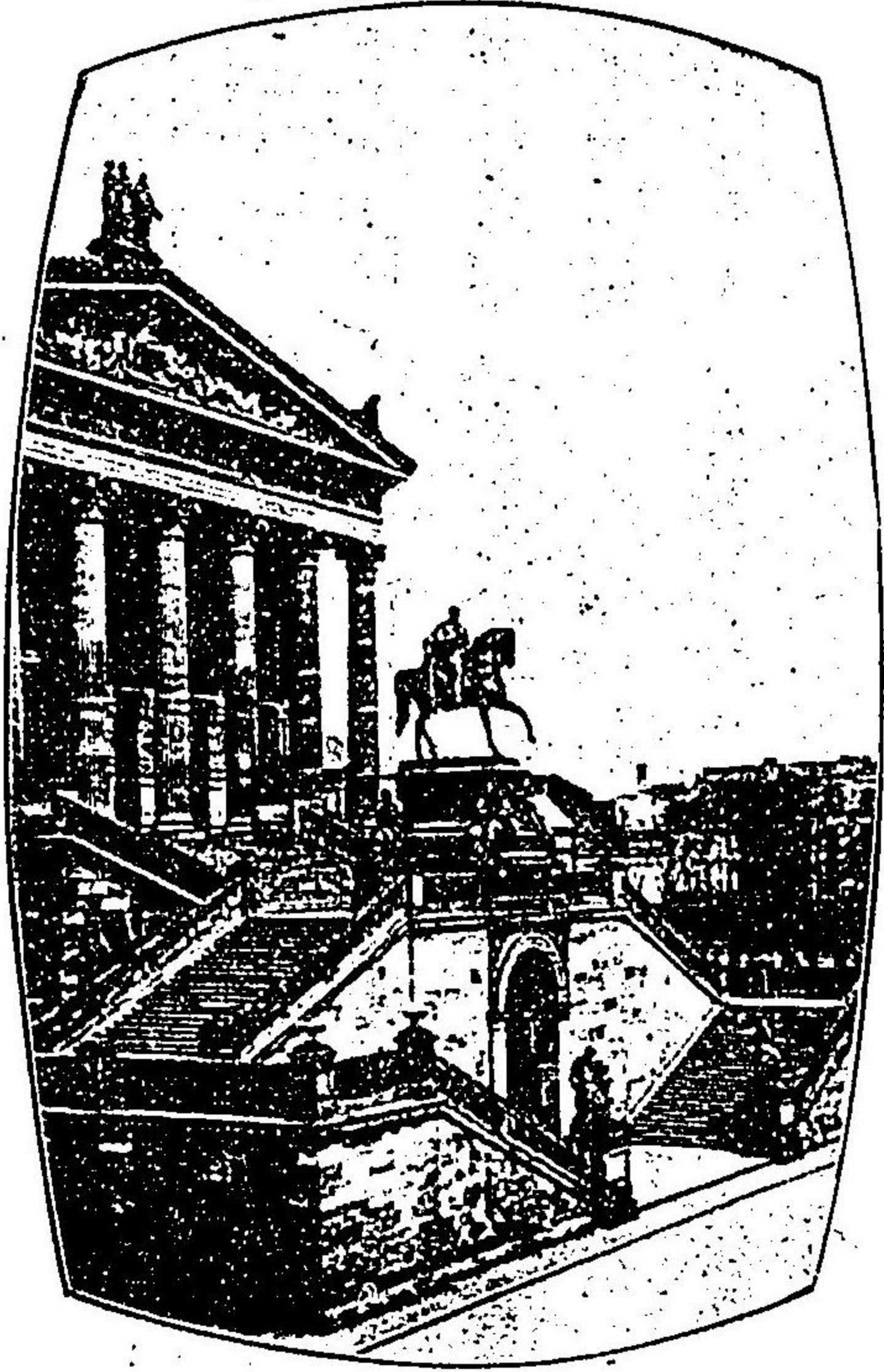
眞正面の基督の生誕、復活の硝
 子窓、最も眼立つ。各帝王の墳塋、

比公の紀念像などあり。

同寺院の筋向ひの國立美術館を訪ふ。此處には、近世の繪畫、彫刻を集む、色彩の濃
 古るい畫よりも、今の鮮明な
 寫生風の繪畫の方が、氣持ち
 宜し。

館 術 美 立 國

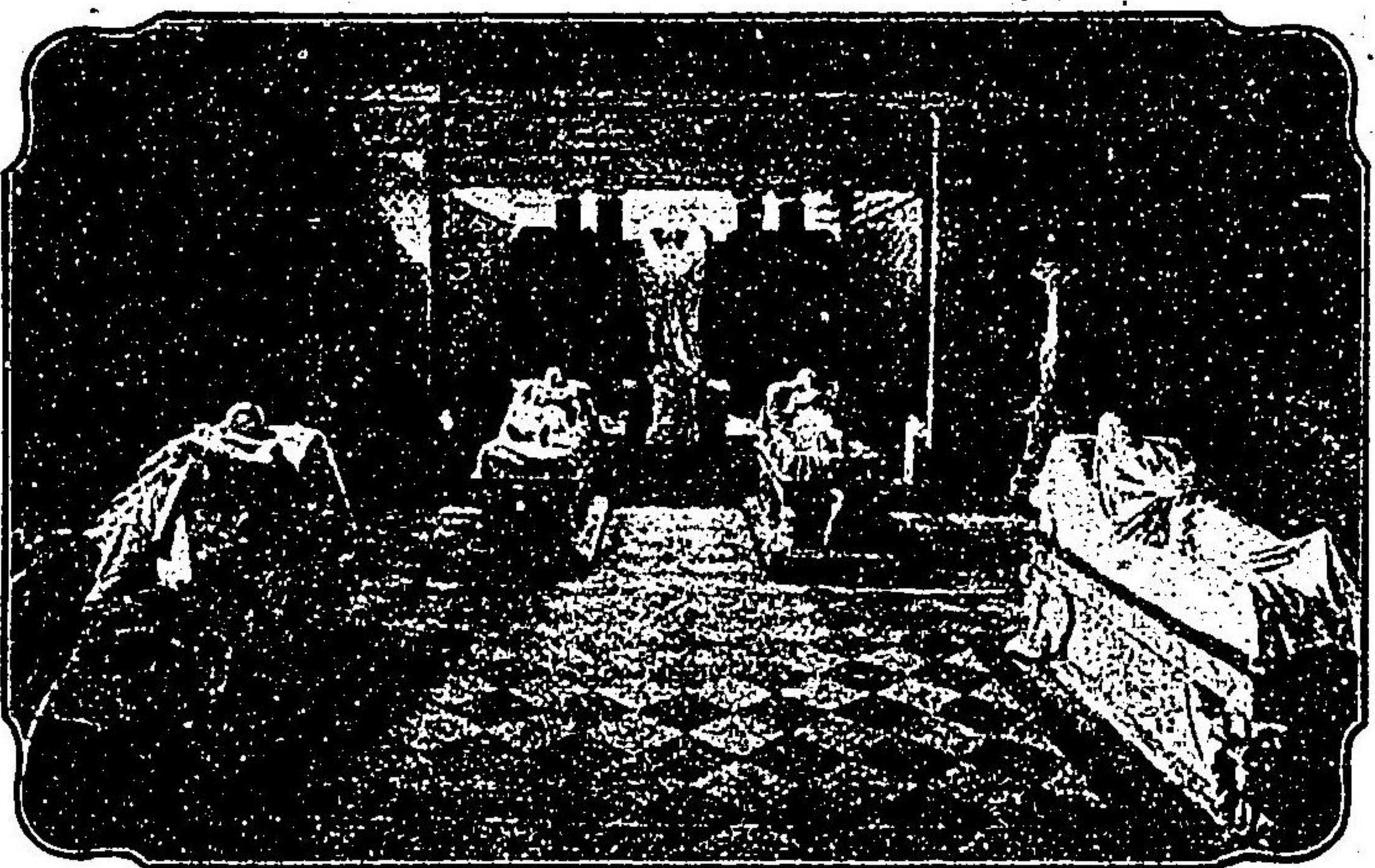
馬車に乗つて、菩提樹街ウンテルリンデンの凱
 旋門を潜る。此の門の上に、
 勝利の女神が、四頭の馬を御
 して立つ。此の神像は、曾つ
 て、奈翁の爲めに、奪ひ去ら



れたのを、後フ王が巴里から取り戻して、此の上に載せた。巍然たる國會の前を過ぎた
 が、其の前に、比公、モルトケ、ローンの三大銅像が立つて居る。其の附近に、普佛戰

争の紀念塔が高く聳ね、其の上に、金色の女神羽を擴げて立つて居る。歸途凱旋道を通はる。道路の両側に、歴代の皇帝、巧臣、學者、詩人、美術家、音樂家等の半身像、白く立並んで居る。

午後、馬車で、チーアガーデンの大公園内を走る。公園は一大森林であつて、折り折り、木の間には、池沼はの見過て、其れにボートを浮べるなど、風情はもいはれず、裾を片手に、褰げ行く婦人いと多し。チーア公園を。一直線に通はり過ぎて、シヤロツテンブルヒ市に入る。離宮の門の臺石に、左右に勇士が楯を構へて、立つて居る。皇廟の中央に、ウキルヘルム三世と、ルイザ皇后の御陵がある。彫刻美しき石臺に、笑めるが如く、仰向けになつて、隻手を胸に宛てゝ居る。ラフ氏の彫刻で、歐洲中で、最も美しく、卓絶して居ると云ふ。白い大理石の上へ、天井の青硝子の色映りて、蒼白になつて居る。普佛戦争の時、ウキルヘルム一世が此の廟を訪ふて、開戦を告げ、戦後復訪ふて、勝利を報告したと云ふ。



シヤロツテンブルヒ皇廟

かくて同地を去り、松林内を行くと、時ならぬ、射撃の音を聞く。ふと森林外に、警戒兵の立てるを見て知つた。ア、射撃があるのだなど……馬車は競馬場の門外に停る。實に廣い競馬場で、東京の青山練兵場位は、確かにある。二輪車の馬車が柵内に走つて居る。是は、見物人に馬の品定めさせて、馬券を買はしめるのである。樂奏起ると見るや、幾臺の馬車競争を初める。其れよ彼れよと云ふ中に、勝敗定り、忽ち馬券の相場揭示さる。我等一杯ビイヤを飲むから、大熊君が連りに勤めるから、乗り氣になり、大枚五マークの馬券を買ふた。獨逸人の案内者も賛成し、大に奔走し

て呉れる。鎌田君も、田邊君の爲めに、力を入れやうと大に欣ぶ。所が、僕の定めた番號の馬が、ペケで大に遅れて負けたから、大笑ひとなつた。鎌田君も二三人組むで賭けたが、是れ亦失敗、僕亦五マーク出したが、いけなかつた。逐うと、僕は五圓失ふた。大捷を得た者は狂喜して居る。實に馬鹿げた話なれど、競馬は矢張り馬券で、人氣が引き立つ。思へば、是れも一生の笑ひ草である。歸途、チーア公園の音楽家ワグネル石像の前を通はり、ホテルに歸へる。食事には、何時も歐洲の特産櫻實が出る。

夜は獨り自動車を驅つて公園に遊ぶ。今し樂奏の音騒がしき、電燈の眩ゆき前を、群衆がろろくと練り行く。木の下影に電燈を釣し、緑の葉に映じて、螢か、花か、紅紫の光線亂たる下に、高帽や、ボン子ツトがビイヤを飯ひで居る。何處のビイヤ店も此の通はりで、樂奏を加へて、景氣を添へて居る。伯林の公園は、十二時になつても、一時になつても此の通はりで、夜の暮るゝを知らぬ有様である。僕は亦自動車に乗つて、ホテルへ歸つた。操者はタクシメートと云ふ、自動哩數表示器を見て、一マークと云ふ。

ポツダム

●同十七日 晴天

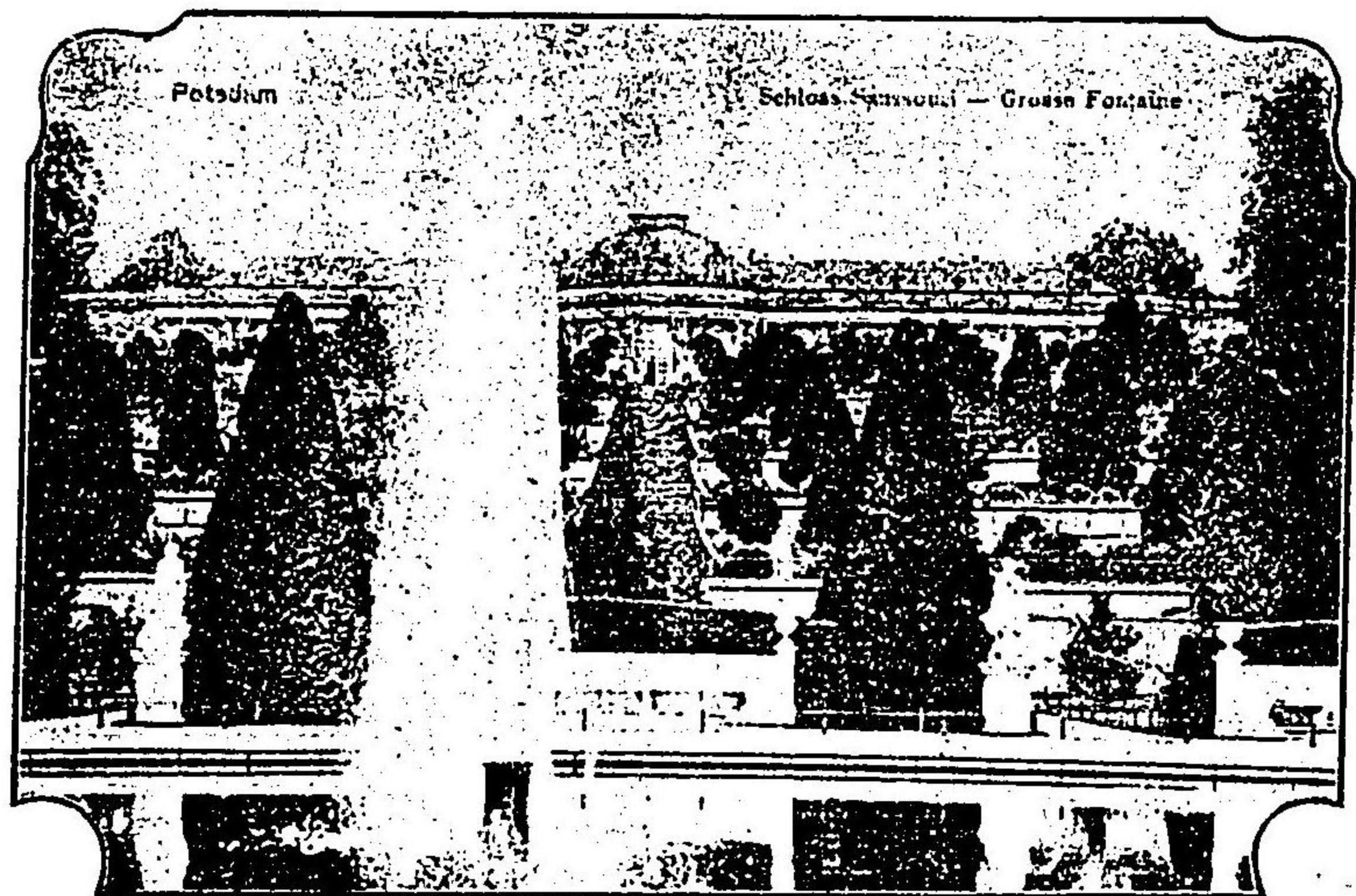
乗合自動車 松林 伯林 新離宮 王宮

伯林に歸へる 東和の主筆 露都に向ふ 惜しき伯林

ポツダムは、伯林から十哩からあつて、汽車もあれば、電車もあれど、旅人客と組み合ひで、乗合自動車に乗つて、ホテルを出發した。紐育と同じやうに、案内者が操者の傍に立つて説明する。されど喇叭を口に宛てない。客人は一二の英人と獨人を除く外、他の男女は皆米人である。或る街で、其の儘撮影され、發車する。伯林を離れる前、住宅町として、多くの別荘のある所を通ほす。自動車は長い松林の道路を、全速力で走る。此の疾驅に婦人の帽の被覆、ひらくと風に靡びく。自動車忽ち停つて動かす。聞けば、車輪に負傷したとやら……其の後自動車は尙も林内を走つて行くと、忽ち湖水現はれ、其の上にヨット浮ぶ。此の邊に家多きは恐らく、避暑地になつて居るのだらう。

廳でポツダム市に入る。自動車の案内者が、客人を離宮内に連れ込みて、説明して廻はる。彼等の簡単な事此の類であるが、さりとて餘りに輕卒ではないか。一千七百八十六年フレデリック、ウキルヘルム三世が此處に住むで居た。エッセンのクルツプより献上の大砲、獨逸の大理石の室、接待室、下婢室、フ王の室、上下する食卓、寢臺、天井は銀の模様畫、音樂室、フ王兵の身長を計りし器械、響應室、ポンペイ發見の石机、ガラスの吊燭、奈翁一世の寢臺、アメリカの木材で作つた箝細工、鹿、狐の首やら角壁上に掛く(カイザーの獵)。是等を見て階を下

宮離ジスーンサのムダツホ



るに、階梯なしの段橋である。こはフ王が跛であつたから、特に坂のやうな、段橋にしたと云ふ。或るホテルで、多數の米人等と晝食をやる。食後、普佛戰爭陳歿者の靈を祠れる寺院を見、皇廟でフ王の墓、英グイクトリア女王の娘の墓に詣いつた。此處に弓を射る勇士の銅像が置かれて居る。

かくて自動車で、カイザーの離宮へ行く。石階を上つて行くと、其處に、支那から分捕つて來た、大けな天文球儀を添へ附けて居る。植物温室の傍を通つて行くと、風車がある。此の風車に曰く因縁がある。フ王曾つて此の風車を目障はりとし、隣家の老爺に買収を謀つたが、聞かず、こは子の財産で、陛下の法律は是れを傷ける譯にいかぬだらうと。陛下之れを聞召し、憂ふる勿れ、朕は汝の財産を保存しやうと云はれたと云ふ。何だか解つたやうな、解らんやうな話である。其の後風車が庭園内になつても、取り拂はれず、紀念として置かれ、其の邊の舊王宮をサンスーシと名づけたと云ふ。其の意味は、憂ふる勿れと云ふ事になるさうな。舊王宮では、音樂室、圖書室、二時廿分の時計―

是はフ王崩御の際、此の置時計が、二時廿分の時停つたので、今に其の儘にされて居る。陛下の用ゐられし机などは、實に質素な物である。拜觀すみて、石階をいくつも下つて行くと、幽邃閑雅な大庭園内に、大泉水漲つて居る。

我等の一隊自動車に乗り、ポツダムを去り、午後四時頃伯林に歸へる。

夕食後、喫煙室で、東和の主筆老川氏と語り、父は富山縣の者ですと云へば、未だ故郷の人と遇ふた事が無いとて、忽ち睦まじくなつて、互に話した。我等は出發の準備整ひて、ホテルを出掛けると、彼の羅馬のホテルで遇ふた、加福君と出遇ふ。君云ふ。あれから和蘭を経て、今當地に來たぞ。さて馬車に分乗して、停車場へ行く。多くの日本人に送られて、露都に向ひ、出發した。さすが同胞の人情は厚いと、深く感じた。汽車は伯林の市街の上を過ぐ。あゝ惜しき伯林よ！此の世界的都會にたつた二日間、僕マー一遍伯林へ來て見たい。

●十八日 晴天 獨露の國境 喧しい旅行券 我等の心配 笑ふてはいかん

一日森林 辛氣な汽車 日が暮れぬ

正午前獨露の國境を過ぎ、露國側の停車場に卸りる。税關へ行つて待つて居ると、荷の底から顛つくり返へされて、大につぶやける婦人を見た。由來露西亞の税關は亂暴で、荷の底から改めるさうである。ソシテ外國旅行券を非常に喧ましく云ふので、先づ是れを受取つてから後、名を呼んで荷を取り調べる。我等の旅行券は倫敦で、露國領事に裏書して貰ふた。露國に入るには、必ず此の裏書が肝要で、是れが無かつたら、露領に入る事が出来ない。ロシヤが恁麼旅行券位に、二重三重も手數を取らすとは、未だ專制國の夢が醒めないと見ゆる。我等の旅行券は、メレンダー君が一纏めにして、露國の官吏に渡した。今かくと待つて居ると、容易に我等の番に廻つて來ない。仕方がないから、腰掛けて居ると、一番最後に、官吏が我等の名を呼ぶ。サー來たぞと思ふて行くとき、旅行券を渡して呉れる。トランクの蓋開けさせたが、案外觸はりもしないで、一寸見た丈ですまして呉れた、思ふに、日本と戰爭した事があるとして、日本人には、特に大眼に

見通がしたのかも知れない。ロシヤ人も中々優しいなど思ふた。僕がトランクの蓋をした時、僕の荷を扱ふ爺が、トウケウ〜と叫く。然うだ〜と頷ついたが、奴さん捕虜に行つたのか、又は日本を懐しがる波蘭人も知れない。かくて停車場の食堂へ行つて、晝食をすると、薩摩汁のやうなスープが出る、停車場で両換して出發する。

我等が露國に入るに先ち、ロシヤは日本と戦争して、負けた國だから、日本人を見たら其處に恨むかも知れないと心配する。メレンダー君、注意して云ふ、ロシヤへ這入つたら、一切笑ふてはいかんと云ふ。汽車は一日森林内を走つて、いや茫々漠々たりや。ロシヤは大國と聞いて居たが、ロシヤへ來て、初めて大けな國ぢやと知つた、汽車はのろのろで、速力おそく、偶々汽罐車に故障でも出來たら、其の儘立往生で、何時間でも停つて居る、此處の汽罐車は薪材を使用して居る。夕食は食堂が無いから、停車場で腹を満す。汽車は進行を續けたが、何時まで經つても、日が暮れない。こは不思議、夜の十二時になつても、夜明けのやうな空つき、唯見ゆるのは、うすぐらい森林の大平野、何

だか悲しうなつて來る。

聖彼得堡 (一)

●同十九日 晴天

延着||妙な馬車||尻の大けな御者||入京第一の感想||コンパイト金米糖

寺||御所車陳列館||子バ河||彼得大帝の舊居||菩提所||ステ

ツセル將軍の牢獄||船上の喫茶||クロンスタットを望む||冬

宮と官省

汽車は、豫定の時間になつても、一向著かないから、欠呻の百遍も爲たいらう。遂うと二時間遅れて、十二時に延著した。停車場外に出ると、おや、櫟の附いた馬車が、仰山並んで居る。おまけに、御者が鏡餅のやうな尻を、臺の上に、どつかと載せて居る。聞けば、其のけつが大きい程、御者の價值があるとやら……其れに其の顔は、蟻蛙見たいな顔で、鬚一杯生やして、黒の襦袢に赤い紐しめて居る。僕はれを見て、口あんぐり

……我等是れに、乗り込むか早いか、ゴロ／＼した石の上を、ガタンゴトンと揺すぶられながら行く。けつたいな道やなど思ひの外、柔かい木の上を走る。今最中道路の修膳

をやつて居ると見え、龜甲形の木杭を打込むで居る。コンクリートの道よりも、觸はりがようて、音がせずによい。昔彼得帝が莫斯科から、此處へ都を移されたとやら、

露都は左程繁華でも無けれど、大まかな立派な都會である。ソシテ世界最北の大市街である。

午後馬車に乗つて、見物に出掛ける。金

米糖見たいな寺院の家根が見れて来た。こはザンと云ふ寺名で、歴山二世の悲惨な最後を吊ふ爲めに、二十八年の星霜を経て、建てた寺である。一千七百八十一年、陛下の馬



金米糖寺

車御通過の際、兇漢の爆裂弾で、敢へなき最後を遂げさせられた場所に、柵をして居る。柱の臺は西比利亚産の黒マーブル、仰げば金光燦爛たる天井、四壁は聖像入りのモザイクの壁畫で、實に莊嚴を極めて居る。モスコイ産のモザイクの戸、商人献上の、金剛石入りの歴山帝像など見るべし。禮拜堂には、露國特有のマリアが基督を抱ける、額面を飾つて居る。次ぎに御所陳列館を見る。波蘭のワルソー攻めの際、モスコイ商人献上の皇后の機歴山三世載冠式に用ゐた馬車、現皇帝載冠式の馬車、是れには八匹の白馬曳くと云ふ。此の馬車は獨逸のフレデリック三世の贈つた物、載冠式に用ゐた十個の馬車、是等は歴山二世の際作つた、露西亞製である。カザリン二世帝の馬車は英國製、彼得大帝自作の機、歴山二世の爆裂弾を受けた馬車、斯廢物は飾らいでも宜いのに……二世と云ふは、現皇帝の叔父さんだと云ふ。十人乗りの機、百七十頭の馬具、蒙古献上の天幕、アフガニスタンの貢物としての馬具等であつた。各大臣の額など見て外に出る。子バ川の岸から市内に入り、モスコイ行の停車場の前に、御丁寧にも、歩哨が歴山二世

の銅像を守つて居る。カザリン二世の銅像、ニコラス一世の銅像、貴族院、セントアイザック寺院、元老院、岩上に踴躍せる彼得大帝の銅像など見て、ニコラス橋に出で、再



彼得大帝銅像

び子バ川を連ふて行くと、四本煙突の破船、さびしく繋がつて居る。案内者笑ふて曰く、是れは日本海海戦に、遁がれたアスコルド艦である。さて引返へして行くと、皇帝のヨットを繋いで居る。子バ川の彼岸に、美術館、大學、海軍省、夏宮等の大厦高樓立ち並んで居る。

グリーンチ橋を渡れば、此の地、昔は瑞典の領分である。彼得大帝自作の舊居を訪ふ。帝は人の知れる如く、自ら職工に身を籠して、和蘭で、造船術を習はれた。其れが爲め、

船を作つたり、家を建てたりする事は、非常に器用であつたのである。或る男が神前に、平伏つて拜むで居る。外に出掛けると、巡査が恭々しくやつて来て、馬車の戸を開けて、我等を載せる。ソシテ案内者から、ポチ貰ふて一禮した。ロシヤの巡査は宜い加減な者……

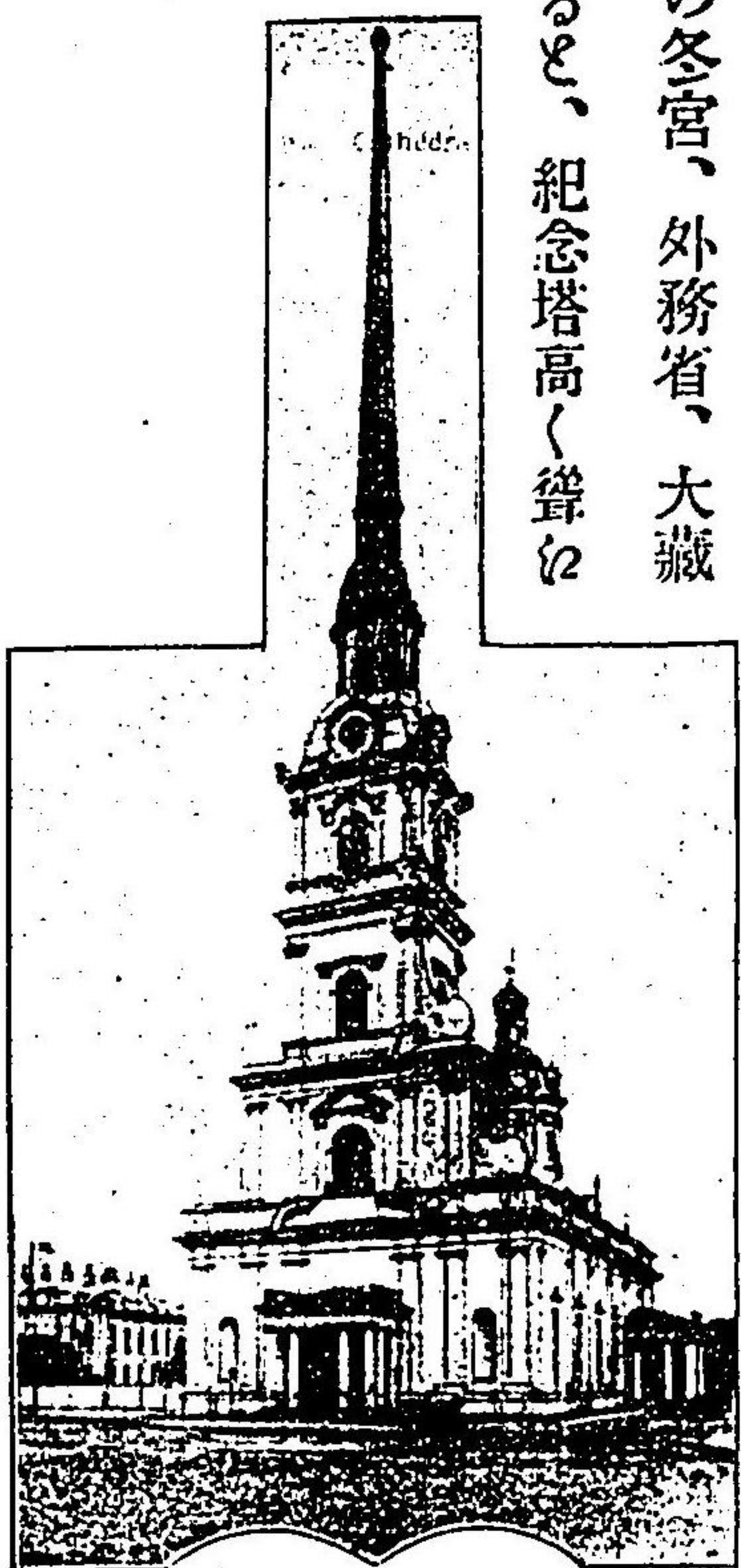
次ぎにピータポロ寺院を訪ふ。廟所に入れば彼得大帝、歴山三世の墓がある。新築の方に、ウラヂミル大公の墓がある、外に出ると、ピータポロの塞と云ふて、其處に、ステッセル將軍以下五十二名が、三年間縛がれた牢屋があると云ふ。彼れが、日本から百五十萬圓の賄賂を受けたと云ふのやさうな。實にあほらしい話さ。我等は馬車で、落葉松の道走る。川船の上で、茶を飲む。遙かにクロンスタットの煙むりを見、バルチック海の波仄かに見る。案内者云ふ、自分は獨逸人であつて、露人を妻にして居ると云ふ。其れで笑ふて、アスコル艦を見せたのも、無理はないと思ふた。かくて亦馬車に乗つて、イエランゲの公園を通はる。粗糲疎らな落葉松しげる。電車の通ふ大道を行くに

、赤や青の、見素ばらしい服きた、髷だらけの労働者が、多く通はる。寺の鍾ガーン、ひびく。往來の人、我等を見て立ち止まる。何にか云ふて居ないのか知らんと、氣持ちわるし。而し露國へ來て、大熊君の髷は笑はれないやうになつた。

子バ河の橋を渡る。赤亞の冬宮、外務省、大藏省など取り圍める間へ出ると、紀念塔高く聳いて居る。門を出づれば、

即ちフランスホテルである。

(二)



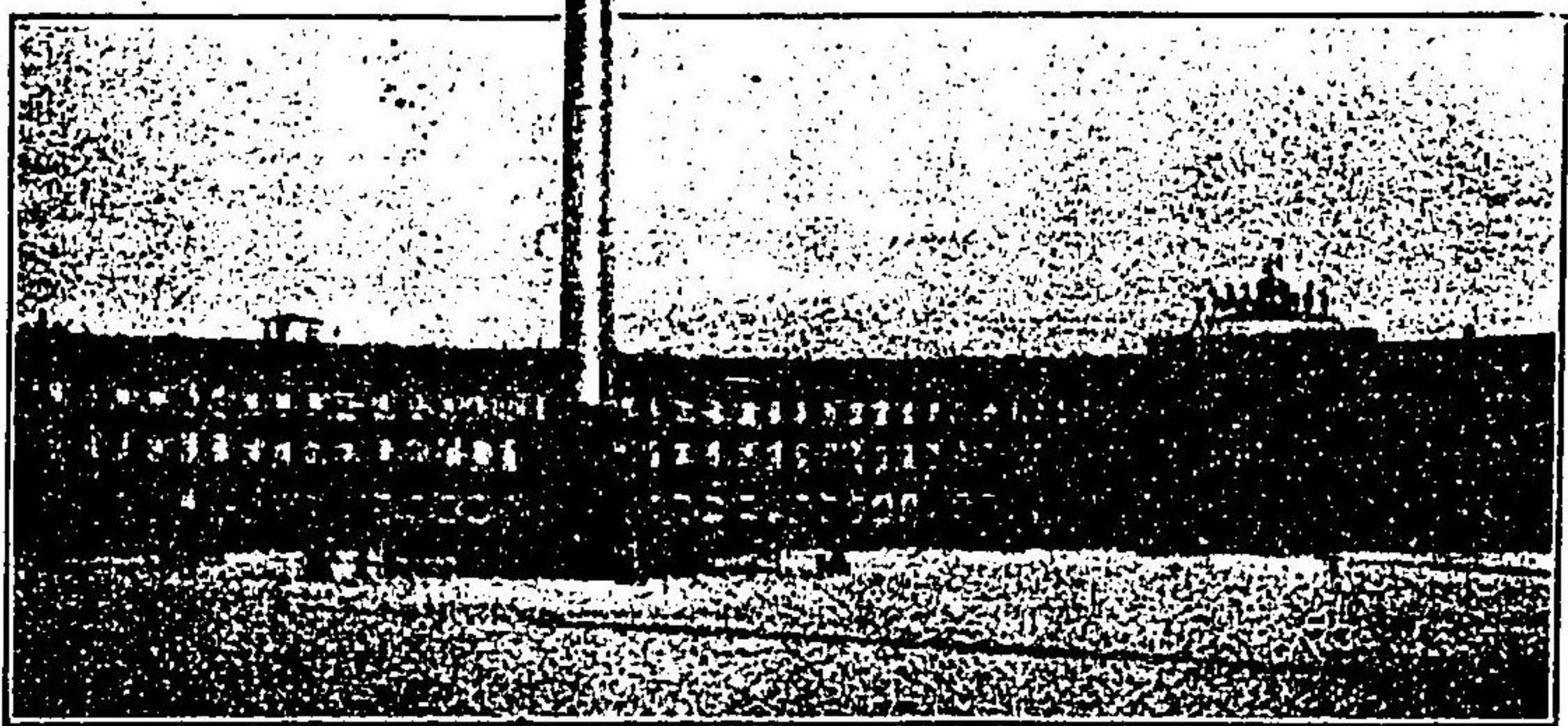
院寺ローボターヒ

●同廿日 雨天

大使館探がし 晝食と將校 繪畫展覽會 セント、アイザツク寺院 露人の迷信 不思議な事 露人觀

けさ大熊君と萩原君と三人で、大使館へ行つた。日本の大使館は十四番と聞いて居たか

ら、子バ沿岸を連ふて行つた、十四番館へ這入れば、容易に言語通せず。大弱はりに弱つて居ると、役人らしい人出て來て、面會を求むると、こゝは日本の大使館にはあらで、フランスの大使館であつた。此の人親切に往來へ出て、日本の大使館は彼處であるとして、指して教へる。禮云ふて別れ、三人共半信半疑で行つたから、×



塔念組と宮冬

×知れやう筈なく、橋際はに立てる巡查に、目錄書出して問ふて見たら、丁寧に教へて呉れたけれど、是れ亦曖昧で知れなんだ。遂に諦めて、三人共、夏の公園とやらをうるついで、ホテルへ歸つた。ホテルでは晝食になると、陸軍將校がどろろ刀を携げて、食堂へ這入つて來る。中には夫婦連れでやつて來る。露國

の軍隊には將校集會所と云ふ物が無いのか知ら、ロシアの將校はよくないと知つた。瑞西のルザンから、萩原君と鎌田君と僕と、ビーヤ同盟があるので、何時もビーヤの二壘を扱く。支拂ひは一人づゝ順番に當るので、其れで差引勘定がなくなる譯である。午後は萩原君と僕と三人散歩に出で、冬の王宮と外務省の間を通つて、繪畫展覽會へ行くと。此處は王宮と續いて居て、宮内省の管轄に屬するのである。繪畫、彫刻に見るべき物いと多し。守衛が錢欲しさに連いて來る。或る公園をうろつくと行き遇ふ毎に、意味あり氣に我等を見る。三人は露人の視線を集めて、通ほり抜け、龍大な大寺院に入る。露都で最も目立つのは寺院である。此の寺の名はセントアイザックと云ふ。又侯守衛が連いて來る。うるさい奴。女が小供を抱き上げて、聖像の額に接吻させて居る。露人は至つて信心家で、又迷信の國民である。宗教は所謂希臘教で、教長は皇帝なのである。守衛が禮拜堂の奥まで見せて呉れたから、錢やれば一禮して居る。此の日雨シヨボくふりで、院内暗く、唯臘燭の細う上れるのみ。

露西亞で最も不思議なのは、夜の十二時になつても暮れない事で、西北の空を赤く染めて、薄す暗らくなるばかり、話して居ると、時間の經つのを知らず、不圖時計を見ると十時、いつ斯麼になつたやらと笑ふ。街路を見れば燈火つかず、馬車の音のみ高し。思へば、世界の事と云ふ物は、何處も同じと云ふ事無いものかな。抑々此の奇觀の起る原因は、世界が圓いと云ふ證據なので、太陽と地球の緯度の關係である。露西亞人は素外親切であつて。日本人に對して、好意を以て迎へて呉れる。所謂大陸的の襟度で、日本人に惡感を起こさせなかつた。個人として見る露西亞人はお人好しで、至つて親切である。其れに日本人の中には徒らに露探呼はりして、彼等に惡感を抱かせる。最う少し日本人は度量を廣く持つて、彼等の應揚な所を學ぶべし。

(三)

●廿一日 晴天

勸工場ノートルダム寺院―ベシキの葉―家のやうな汽車

―露西亞の女―廣い野

僕は繪葉書買ひに、けさ萩原君と勸工場へ行つた。其處へ行つたが、老人は腹下るとして、ホテルへ歸へる。僕はたんと繪葉書買ふて行くと、ノートルダム寺院の前に出る。此の寺院は、羅馬の彼得寺院を型どり、本堂から両方へ、廻廊を突き出して居る。實に立派な大寺院である。黒布を頭から被つた尼僧が一杯出口に居る。僕はうるさいから、故ざと柱の後ろから廻つて、彼等を避けて寺院内に入る。禮拜堂の前へ行くと、黄服を被た、僧侶が出て来て線光を振つて、煙むりだらけにする。滑稽な事する哩と見て居ると善男善女胸に十字を描いて居るのもあれば、平伏つて脚投げ出して拜むで居る男も居る露西亞人の信仰心の深いには、喫驚する。同寺院を出る時、例の物貰ひの尼をよけて遁げて出る。

ホテルに歸へると、萩原君は勸工場の下を通つた時、服にペンキをかけられたとて、服脱いで大騒わぎをやつて居る。服は宛るで鳥の糞かけられたやうになつて居る。是れを見て皆腹を抱へて笑へば、メレンダー君は意味有りげに笑ふ。されど老人の云ふには、

何にも日本人憎しと思ふてかけたのでなく、足場の下を通つたからだ云ふ。蓋し是れが眞とであらう。後で、故ざ／＼機發油買ふて来て、悉皆ペンキを落した。

午後彼聖得堡を出發し、莫斯科に向ふ。家のやうな汽車がプラットホームについて居る。四人と二人に別れて部室を占む。浦搦あたりへ行つのであらう士官を送つて来て居る女が澤山居る。やがて汽車が動く。窓より差し覗けば、あゝ莞やかに笑へる露西亞の女よ！ハンケチを振りて、汽車に連いて来る。設更露西亞も憎くうは無い。思へば日露戦争の時、無数の貔貅がこゝから乗つて、露都を出發したであらう。其の時多くの女が、此の停車場で、泣いたであらう。茫々果てしなき大野原、偶々村あれば、風車の羽緩う廻はれるのみ。清江一碧鏡の如く澄みて、鳥其の上に飛び交ふ。夕食は停車場の食堂で爲す。日永短夜暮れてもくれぬ、不思議な野、仕方が無いから寢臺に入る。

莫斯古

●同廿二日 晴天 日本語の通譯—クレムリン宮—王宮に土百姓—巨鐘—でかい

銅像—爺の歩哨—脱帽の禮—美術館—雀の丘—最後の見物

午前八時、莫斯科停車場についた。ホテルの番頭が來て居た。此の爺と手を握り、馬車に打ち乗つて、ホテルへ行く。朝食後、此の爺の案内で、馬車に乗つて、莫斯科見物を初める。此の爺怪しい日本語で、あの太砲は一千五百三十年の物であり升と説明する。あれが佛蘭西の大砲、是れが露西亞の大砲と日本語でやる。鎌田君は兎もすれば、英語で此の爺と語り、此の爺は日本語で喋らうとする。彼れは久しく長崎に居たとやらを、日本人の妻君を持つて居ると云ふ。

我等クレムリン宮に入る。階段の上は、佛國畫家の作、露土戦争の畫を掲げて居る。惜しい事には、日露戦争の畫が無い。拜謁所、舞踏室など、流石に美事な物。先生に連れられた、小學生徒の一隊に遇ふたが、殊に可笑しいのは、汚い衣物被た、男女の土百姓がどろく、歩き廻つて居る。宮殿内に立派な禮拜堂がある。露西亞の王宮と云ふ物は、

半ば寺院である。されば彼等農民

は皇帝をザーと崇め、王宮を

本願寺詣りのやうな心持

ちで居る。新王宮から舊

王宮に入る。奈翁が三日

間寝たと云ふ寝臺を見て

、最上の會議室に入る。

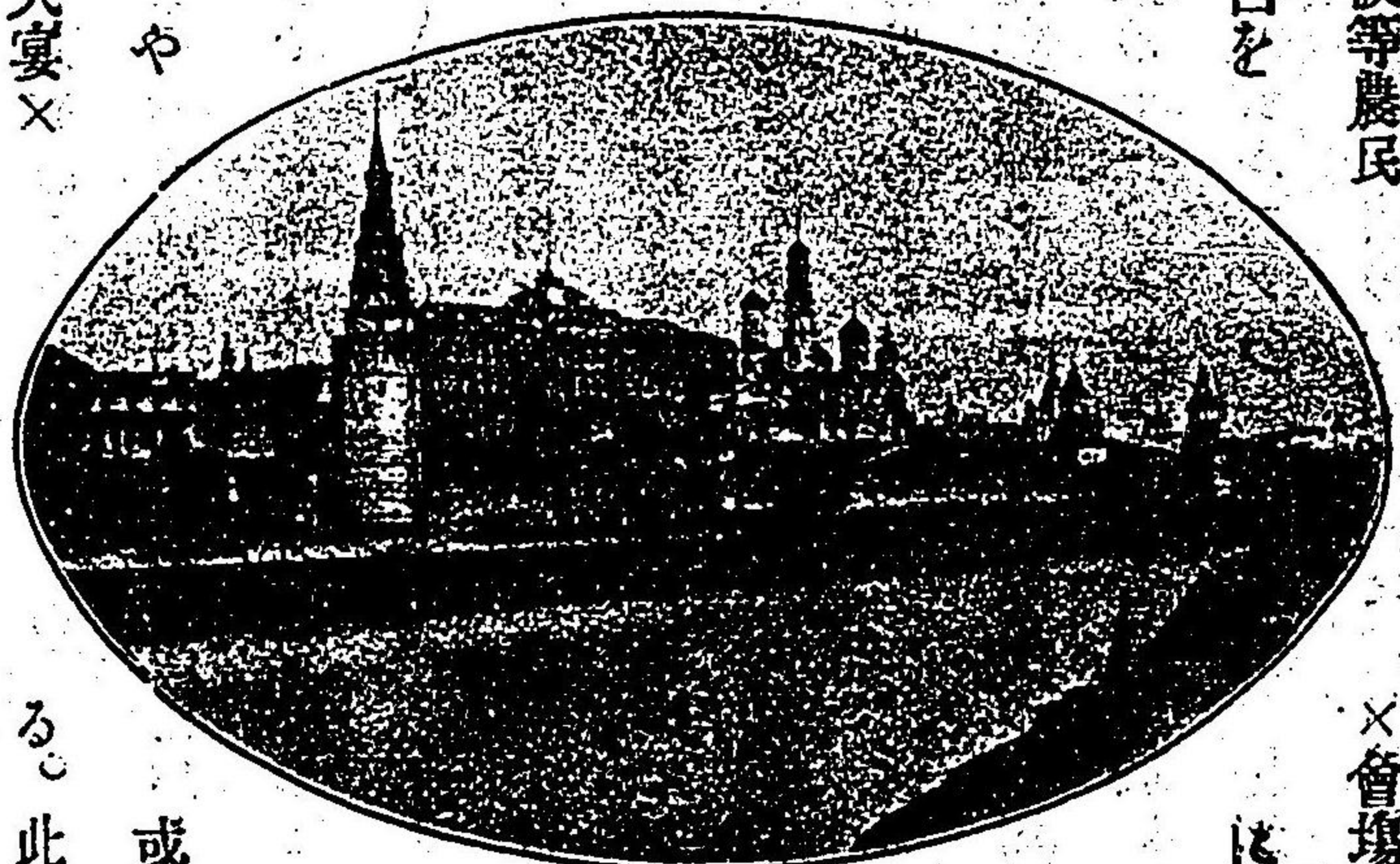
其の當時のロシヤは椅子

と云ふ物が無く、窓の縁

の凹むた所に臺があつて、

其れに腰掛けた物である、や

ゝこしい段橋を下りて、大宴×



×會場の樓上に出る。其の部室の下

に窓がある。昔ロシヤでは女を

卑みて、女官を近づけ無か

つたから、宴會のある時

、女官が此の窓から、差

し覗いたと云ふ。さて王

宮を出で、クレムリン

宮の菩提所に詣づ。坊主

が愚民に引導を授けて居

た、こゝに王の墓がある。

或る暴君の墓丈別物にされて居

る。此の寺院に、モスコイ以前の舊

都から持つて来た、王の御輿がある。

同寺院を出で、豫て聞きし巨鐘の前へ出る。少し破目があるのは、火災の時落ちてわれたのだ。或る塔の下に、でかい銅像がある。是を守つて居る老歩哨が、我等を招いておろましくも、ニッポン〜と云ひながら、衣籠からメタルを出して、買ふて呉れんかと云ふ、おかしな奴と思ひつ、塔内を巡ぐる。銅像の主は歴山二世であつて、衣物がだらつと下つた、非常に大けな胴體である。馬車に乗つて城壁の門を出づ。此の時脱帽せよと云ふ。モスコイの人は此處を通はる時、必ず脱帽するさうである、某君を訪ふて、勸工場に寄る。此處の商店は、恰度ミラノのやうに、通路にガラス天井を張つて居る。午後は馬車に乗つて、国立美術館を訪ふ。―森林中の夕陽、雪の荒野、原野の湖水、朦朧たる曉の海(絶妙)、氷上の土民、クレムリン宮前に於いて、彼得が犯罪人を死刑に處する處、新舊宗門の争ひ、トボルスクの一戦、祈禱、北氷洋の氷海、有名なヴェレスチヤーゲン作の戦争畫、同氏作戦死者の死骸の上に鳥の群れる畫、其の他鉛筆の肖像畫無

數。何れも露西亞で無くては、見られない畫で、要するに露西亞人は繪畫に長じて居るやうである。

馬車は莫斯科の市街を通つたが、繁華な町なく、露都と比べると數等下るやうである。郊外二哩なる雀ヶ丘に出る。此處に一酒保あり。我等は馬車を待せて、其れに入り、茶を一杯飲む。昔奈拿倫一世が此の丘上から、燃ゆる莫斯科を眺めて、無限の恨みを飲むた所である。戦へば必ず勝つ奈翁が、モスコイの雪に勝つ事能はず。コサツク兵の追撃に遇ひ、佛軍總崩れとなり、僅に櫓に乗つて逃れた。實に彼れが非運は此のモスコイの一戦に初まる。元來モスコイと云ふ所は外患の多い所で、ズット昔蒙古の屬國になつて居た事がある、今見るモスコイは當時の雪もなく、戦場の跡もなし。げに寂寥を極めて、モスコイ川緩う流れて、唯金色の塔日光に反射して輝けるのみ。やがて其處を去りて、坦々たる道路に馬車を驅れば、つと女走り來りて、何にか叫ぶ。日本語の通譯云ふ、今の女、其の馬車にのせておくれと云ふたげな。莫斯科の城郭を連ふて、詩人プシキ

ンの銅像の前を過ぎ、夕刻ホテルに歸へる。長い旅行も、けふで見物終ひとなり、明日からクック社の手を離れる。

x

x

x

x

x

x

無教育者—農民—魯鈍—粗樸—上下の差—民権論—

莫斯古に領事館

露西亞人の八分は無教育者で、多數は農民であるさうな。近頃國會で、義務教育の必要を論じたと云ふ。されば露人は至つて魯鈍で、半ば馬鹿である。何が故に日本と戦争したやら知らぬ者が多い。寺院や、王宮の守衛、下足番は錢欲しさに、鄭重に扱ふ。是れが當年大戦争した敵國人だと云ふ感念が、彼等にないらしい。一般の風俗田舎じみて、男女共粗樸で身なりを構はない。然るに上流社會は華奢を極めて、大に贅澤をやつて居るとの事、此の僅少な貴族と、多數の農民との生活程度の上下の差、最も甚だしと。さ

れと露國も時代の潮流に勝つ事能はず。長い間壓制な專制主義に抑へられ、其れに反抗して、君主獨裁政治を打破した。莫斯古には、教育ある有識者間に、民権論を主張されて居るさうである。却説日本の領事館がオデッサから莫斯古に移轉した理由は、日本に取つて、オデッサにはさして緊要な土地でなく、寧ろ莫斯古が西比利亞鐵道の基點であるから、商業上重要な地と認め、此の地に領事館を設置したと云ふ。領事館が莫斯古に移轉した時、露人は、亦日本は戦争するのではないかと疑ふた。領事館の人其の誤解を説き、日本の貿易上此の地に置かれた理由を述ぶるや、大に喜びで、續々商工業者、領事館を訪問する者多かつたと云ふ。

第七編 歸朝日記

西比利亞鐵道

●同廿三日 晴天 莫斯科の月―停車場―出發の感
 茲に世界一週も大方済むで、今夜西比利亞鐵道に乗つて歸へる。思へば彌生の春海外に出で、より、布哇、亞米利加は遠うの昔となつた。莫斯科も、もうすこし居たいとは思はぬ。ホテルを出る時、主人や、男共に、日本語で左様ならと云へば、露人も亦グッドナイト、サーと丁寧挨拶する。馬車にがたつかれながら、停車場へ行くと、寺院の十字架に、一痕の月が懸つて居た。停車場は流石に大きい。待合室には、神さんまで祭つて居る。さても御信心な事……日本語通譯の爺切符を持つて來て呉れる。急行券と、乗車券と、寢臺附列車券と。急行は日曜と水曜の二回發車すると云ふ。箱の中で、メレン

ダー君と手を握り、窓の外から、ホテルの主人と、爺と、領事館の人と握手して訣れた。二人づゝ各室を占めたが、莫斯科から一所になつた、日本人三人乗り込むだ。午後十二時ガーン／＼の鉦聲と共に、堂々と發車する。サー是れから漸よ／＼西比利亞鐵道―萬里遠征の途に登る。其の門出や、實に壯快の念に堪へなかつた。此の先き十日間も、瀛車に揺られて行くのだ。僅に栖を殘す北の空、薄暗き露西亞の野を、瀛車は走る。早速、萩原君と先登の食堂へ行つて、茶を一杯飲む。

●同廿四日 晴天 茫々たる野―蜜柑―むさい土民―緩ろい瀛車―ポー
 朝食はパンと茶。見渡す限り茫々たる野、地平線まで見透はしが效く。莫斯科で買ふて來た蜜柑を、小刀で切つて喰ふ。停車場へ、むさい土民が遊びに來る。男は鬚蓬々と生やし、女は赤い縋縋を被て居る。汽車は緩ろい瀛車で、一時間三十哩しか走らない。夕食も済むで、漸やく暮れかゝる。汽車は寂しい野にポーと汽笛を鳴らす。

●同廿五日 晴天 駱蛇―石器皿―夜あかし

鎌田君が走つて来て、駱蛇が見ゆると、僕に告げる。廊下に急ぎ出ると、成程草の中に五六匹居た。汽車は追ひ／＼上り坂に差しかゝる。某驛で石器皿一つ買ふ。僕はウラルの山頂見たさに、鎌田君と食堂へ行つて、茶を飲み、夜あかしをやる。午前二時絶頂へ来ると云ふので、餘り眠むたくなつて床に入る。

●同廿六日 晴天 夢のウラル山／＼いよく西比利亚／＼喰ひちらす／＼

池に鳥／＼深碧の沼／＼さびしき月

夢の間にウラル山を越へた。午前二時であつたと、ア、惜しい事した。いよく西比利亚の野に入る。汽車は荒漠無人の境をひた走りに走る。鎌田君が僕の部室へやつて来て、大事な蜜柑を喰ひちらす。水を湛へた池、幾つも現はれる。鳥が白い羽を擴げて、水の上に、ひら／＼。黄昏、夕空に映つる深碧の沼を見る。清冽蕩けんばかりである。今宵月さびしく牙むて、見ゆつ隠れつ、汽車と共に走る。あゝ月は人なき西比利亚の野をも照して居る。

●同廿七日 晴天 白樺／＼夕食が楽しみ／＼一市街／＼オビー河

けふは野の趣き少し變はり、白樺巨人の如く突立つて居る。夕食が二度の食事中、一番御馳走である。薩摩汁のやうなスープ、一人に二杯宛て、菜三皿、終ひにアイスクリームか菓子。食事中、三大河の一なる、オビー河の大鐵橋を渡る。濁流滔々混々として極まる所なし。トムスクに著く。寺院、馬車、電燈など、人跡絶へたシベリアに、此の市街を見やうとは……

●同廿八日 晴天 白天幕／＼熊使ひ／＼複線工事／＼エニセイ河

朝白天幕見ゆる。是れは兵營なのである。或る小驛で、熊の子二匹、熊使ひに曳かれて居た。人珍らしがりて、是れに集り、寫眞撮るもあれば、パンやるもあり。僕も傍へ行つて見た。西比利亚鐵道は、折角複線工事をやつて居る。露國も中々豪らしい國である。クラスノヤスクを経て、エニセイ河を渡る。なみ／＼と濁流沃野に注ぐ。

●同廿九日 晴天 千遍一律／＼ビーヤ代

西比利亞の旅行程千遍一律は無い。毎日野や森を相手にして居る。けふ、汽車中僕と萩原君の爲め、取り換へて居たビーヤ代を、鎌田君に支拂ふ。君は何時も取り立てゝばかり居るのねと云へば、鎌田君笑ふて、那麽こと云ふなら、最うビーヤ飲まさないよと云ふ。

●同廿日 雨天 イルクーツク驛乗り換へ―牛馬の放養―バイカル湖岸―

無数の天幕―八列側面縦隊―火の子

午前五時イルクーツク着、東清鐵道の列車に乗り換へる。雨大に降る。二時間半停車、食堂へ行つて茶を喫む。支那人の少年給仕が出て来る。汽車エニセイの河源を過ぐ。青草の淺瀬の上に、無数の牛馬放養されて居る。不圖對岸に、寺院の尖塔兵營、工場の煙ひりなど見ゆ。是れ即ちイルクーツクである。二時間餘にして、渺茫涯りなきバイカル湖現はる。水深四千尺、深き事世界第一と云ふ。汽車バイカル停車場につく。棧橋突き出で、レール是れに通じ、汽船是れに横附けになり、浮船渠を浮ばせたる、さても見上

げた物かな。俄かに寒さを覺ゆ、人皆外套を用ゆ。汽車湖岸を縫ふて、絶壁の裾を走る。紆餘曲折五十からのトンネルを潜ぐる。遙かに白霧朦朧として、湖面に柵引き、長驅して山を爲す。湖水に離れんとして、離れず、やつと離れて、茂林に入る。山野に無数の白天幕あり。こは露營同様の兵營なのである。一士官に引率されて行く歩兵隊あり。能く見れば八列側面縦隊になつて居る。さすが廣い所とて違ふた物だ。日暮れて、鎌田君と食堂で茶を喫む。汽罐車に薪焚く。窓外に、塵の如く火の子飛ぶ。

●七月一日 晴天 暑つ苦し―黒龍江―哨兵附の停車場―優美な山―滿洲里

朝チ夕驛につき、プラットホームに散歩すれば、いと暑つ苦し。夕方黒龍江を過ぎ、支那領に入る。北滿洲から、何處の停車場も硝兵附である。兵が又銃して休むで居る。赤い肩章繩をぶらさげた巡查が威張つて居る。驛路を見る毎に、ギリシヤ教の寺院と、ロシアの家立ち並ぶ。是れで、北滿洲も露國化して居る事が解かる。此の邊の山は、皆芝山で恰度三笠山見たいな山ばかりで、如何にも優美な山である。午後滿洲里につき、税

關の調べを受く。

●同二日 晴天

露兵乗り込む―遠廻はりの線路―一望千里―停車場は遊び處―

草火事―哈爾濱―月明

朝、露兵一人歩哨として、我が汽車に乗り込む。日本人を疑ふて、乗つたのかと、皆さわぐ。一つの長い隧道を抜け、グル〜と螺旋形に遠廻はりして、走り下る。既に通つた線路の下を潜ぐる事、恰度アルプス山脈と同じだ。松花江の上流を渡る。支那人の所謂、一望千里の大平野、山無し、樹無し、人無し、家無し、唯蒼々たる青草原のみ。小驛につくと、兵、巡查、汚い支那人の外に、怪しげなロシアの女が彷徨いて居る。何處の停車場でも、村民の遊び所になつて居る。硝子越しに、草火事が見ゆる。午前十一時哈爾濱の停車場に着いた。此處で、下車の乗客多し。税關の検査あり。今夜北滿洲の野、月光腔々として照して居る。

●同三日 晴天

騎兵の散開―ボイラ子クチニア―廉い煙草―最後の食堂―

ニコリスグ―浦鹽着―船中の一泊

朝食堂の窓越しに、騎兵の散開演習が見ゆる。忽ち丘陵に隠れて見ゆるなくなる。シベリアの兵營は悉皆天幕生活である。日本も未だ〜油斷出來ない。午後四時清露の國境ボイラ子クチニアに著、税關吏列車中にお越し。一時十分間停車、支那人二百本で、四十五錢の廉い賣る。今夜の食堂はお終ひなので、卓上に、牡丹、芍薬、躑躅の花馥郁として香ふ。大驛ニコリスグにつく。こゝからハバロフスクの岐線がある。やがて月を碎く大河に沿ふて、午後十一時浦鹽斯德に着いた。日本人數名の出迎ひを受け、露國義勇艦隊グーエル子エンケに乗り込む。我等初め大阪商船會社のスチーマーに乗り込む考へであつたが、金曜に出て終ふたこの事に、勘からず失望した。月高く懸かりて、アクト星の如く港について居る。こゝで初めて、日本海の顔を見る。今夜船中の一泊する。

日本海

●同四日 晴天 電信―浦盤一巡ぐり―出帆―日本海に出づ―荷物の整理―食堂
 早朝起きて、支那人を連れて、電信打ちに行く。彼れと別れて、獨り浦盤一巡ぐりをやる。港は恰度長崎のやうに入り込むで居る。支那人の労働者乞食よりも未だ汚い。午前九時出帆ピータ灣を出つ。霧かゝつて、船徐ろに行く。やがて日本海に出で、針路敦賀に向ふ。荷物の整理に一日費す。食堂は甲板上にあつて狭し。日本人八名で、一番勢力がある。船長、事務長皆獨逸人で、ウエイターは皆支那人である。ロシヤのウオツカ酒を少し飲む。

●同五日 晴天 甲板上の運動―日本海の月―茶話會―一夜を明かす―

故郷の山―鳥賊の釣り船

けふ甲板上の運動を爲す。夜ままなる朗らかな月が、日本海に出て、幽かに日本船から黒煙搖曳する。直ちに船房に歸へりて、鎌田君、大熊君、萩原君を招いて、茶話會を開く。福神漬と茶を出す。僕演説して曰く、諸君は米國、歐羅巴、西比利亞の月を見て

今日本海の月を見る。今迄での失禮を謝して、茲に諸君の健康を祈ると。皆拍手して欣ぶ。餘りの嬉しさに、一夜を明かし、服装を整へるやら、荷物を片附けるやらで、實に忙しかつた。深夜食堂で、茶一杯喫むで、甲板に出つれば、あゝ懐しい、戀しい故郷の山が見ゆる。此の時あゝ日本も世界の島の一つだと思ふた。世界を一周した者でなくては斯かる感想は起こらない。無数の鳥賊の釣り船が沖に浮びて、漁火波間にちらつく。午前二時岬を巡つて、灣内に入り、敦賀沖に碇泊す。

歸 阪

●同六日 晴天 兄さんの聲―上陸―敦賀ホテル―解散―京都驛―出迎ひ
 兄さんの聲が聞こへる。やれ嬉れしや。兄さんの顔を見て、握手して悦ぶ。西田さんも見えた。十二銀行支店長も出迎ひに来て居られる。ランチに由つて、棧橋に上り、税關の検査を受けて、俥に乗り、敦賀ホテルに入る。會員は此處で解散した。午後二時出發

一等車に乗る。京都驛で、鎌田君に別れ、亦大阪で遇ふ事を約した。英次郎さんと呼ぶ聲するに、振り向くと友さんであつた。小川の叔父さんも出迎ひに来て居た。同氏に阿母さんはお變はりないかと尋ねた。午後六時、大阪に著、多くの出迎ひを受く。最初に姉さんが走つて來られた。—世界一周萬々歳!!!

(終はり)

旅行者に對する注意

旅行者の目的により、各自見物の方法を變へなければならぬ。例へば漫遊者にあつては、公園、博物館、美術館、寺院、故蹟など見たからうし、又其の方が氣の保養になつて宜いし、趣味も深かい。商用の人なら、好むで經濟的方面を見物すべし。商店、會社、銀行、工場、百貨店、造船場、開港場などは是非視察する方が宜い。其の他専門の職業のある人は、皆それ／＼各方面に於いて、自己の撰ぶ職業を調べるが宜ろしい。されど如何なる職業の人と雖も、其の地有名なる名所は見て置かなければ、折角遠い外國へ行つた甲斐も無く、歸朝してからも人に問はれても話されない譯になる。普通の漫遊者ならば、唯可成的各方面を見物するに限る。

旅行者は豫め旅行地の地理と歴史を研究して置いたら、餘程效めになる。又は紀行文、案内記など手にして、長い航海中などに調べて置く事、是非必要である。

其れから外國語の素養があつたら、最も妙である。されど英語さへ通用出来たら、世界一周は苦勞なしに出来る。

時間と経費は旅行者に關して、最も大切な要件である。出来る丈小時間に、出来る丈費用を節減して、有効に見物すると云ふ事が肝腎である。其の點は單獨旅行よりも團隊的旅行の方が儉約出来る。食事、出發などの時間を嚴守して、能く案内者の命令を聞き、残らず見物すべし。費用は旅行費、宿泊料の外土産物、ポチなどに金錢を浪費しなければ、幾らも易う上る。先づ四千圓あつたら、世界一周は出来る。次ぎに注意しなければならぬのは、ポチ即ち心付けである。西洋は金錢主義の國なれば、少しつゝで宜いから、用事を云ひ附けた時、ホテルのボーイなどにはやらねばならぬ。殊に米國に至つては猶更らである。餘り吝ちくしてポチなどに節約するも宜くないが、さりとて決して多くやる必要もない。特別の要務を云ひつける時はいざ知らず。普通の場合は十錢程やつたら澤山だ。されど長い間連いて來た案内者には、少し奮發して、紳士として恥づかし

からぬ丈の禮金をやる方が宜い。更に進むで、兩換の一件である。汽船會社、正金銀行でして呉れる。汽船中でも、ホテルでも、停車場でもして呉れる。各國とも皆兩換する必要があるが、佛蘭西、伊太利はラテン貨幣同盟があるから佛國貨幣でも、伊太利へ行くと通用出来る。今左に各國貨幣の對象を示さん。

▲米 國

一弗(我が約二圓) 一セント(我が約二錢)(二剩すべし)

▲英 國

一磅(我が約十圓) 一シリング(我が約四十八錢、十二ペンス)

一フロリン(ニシリング、九十八錢)

一グロイン(五シリング、二圓四十五錢)

一ペンニー(約二錢) 六ペンニー(二十四錢五厘)

一ペンス(約四錢)

一磅は二十シリング、一シリングは十二ペンスの割り

▲佛國

一フランク(約十七錢)

一センチム(約二厘)(四剩すべし)

▲獨逸

一マーク(約五十錢)

一フェニー(約五厘)(五剩すべし)

▲露國

一ルーブル(約一圓餘)

一コペク(約一錢餘)(我れと大差なし)

携帯品は成るべく簡單にすべし。持ち物の多き程旅行者に迷惑な物は無い。是れ余一人の説で無い。海外旅行者の皆経験する處で、余の如きは餘り重量多くて、途中から送り

返へした位である。折角歸朝しても、其の荷物が未だ著いて居ないと云ふ有様であつた。郵便物は西比利亞線を通過すれど、貨物は印度洋を通過する。其れゆゑ非常に遅延するのである。携帯品の種類は中位なトランクに裝束、ワイシャツ、手帛、紙、カフス卸、ネクタイ、寢巻、書籍(旅行用)、山高帽子函位な物を入れる。而してワイシャツは五六枚あれば、幾らも何處でも洗濯が出来る。其れから洗濯物入れのズツクあらば妙。裝束は脊廣服二着に、夏服二着、フロックコート一着あらば充分、ターキシートや燕尾服、絹帽の如き物滅多に要らぬ。旅行者は脊廣で許される。常に注意すべきは白いカラーに、白いワイサツを用ふる事である、カラーはダブルを多く用ゆべし。其れを入れるのには馬蹄型のカラー入れが体裁が宜い。不用な物は先きに云ふた服装と、絹帽と其の他無用の書物である。両眼鏡も餘り使用しなかつた。トランクの外に、手携鞆が要る。其れにズツク包みの化粧道具、剃刀、革砥、楊枝、齒磨粉、石鹼、刷毛、香水、チツク、剪刀、針、糸、或は安全剃刀、鳥打帽、上靴、扇子、ピン、ハンカチ、手袋、書翰箋、

状袋、喫煙家は煙草とマッチ但し税關で取り調らべを受く故煙草と酒は携へぬが宜い。藥品は多少用意すべし。但し多きを要せず。銀行の信用券、旅行券は最も大切なれば是れ丈財布に納め錢入れと共に肌身に絶へずつけておくべし。鍵はズボンのかくしに入れ鎖で帯締めから釣るすべし。土産物は外國人の好きさうな繪葉書、團扇、扇子、人形、絹物がよからん、交際上必要である。夏服について一言しておく。歐米では日本のやうに白ろを用ゐない、夏服にはセルカアルパカか羅紗の縞物を用ふる。彼の地で新調するか餘暇なくば、百科店か洋服屋で廉うで出来合ひがある。外套、雨外套、蝙蝠傘も要る。手帖、鉛筆、萬年筆は見物する時は非ポケットに入れ置くべし。名刺は表面漢字裏面羅馬字で記すべし。是れ社交上名刺なければ大に不便であるからである。

土産物は、男子用には、時計、ピン、子クタイ、美術品、シャツ、靴、羅紗地、帽子など、女子用には指環、巻櫛、シヨール、子ルなど、小兒には、玩具、繪葉書など宜からん。其の他日本にない物を撰ぶが宜い。米國は總べての價格高ければ、思ひ切つて買は

ねば、欲しい物も買はれないやうになる。是等の土産物は、クック社などに委託して、日本へ送るべし。但し貴金屬は手携鞆の奥にしまひ置くべし。

電報は、米國ならホテル直接取り扱うやうになつて居る。而して各國共海外電報は高價である。大抵安着のみの意を報ずる場合、五圓乃至九圓まで徴收さるべし。余は太平洋上の無線電信二通と、ホノル、桑港、紐育、倫敦、伯林、莫斯科、浦盤等の地から電報を打つた。節約しやうと思へば、電報の必要なく、單に繪葉書か、封書で報ずれば一月経たずは、大抵内地に届く。されど心配する家庭か、さもなくば早く安着の土地を報らしたいと思は、電報料をはり込むべし。高いやうで易いのは電報である。

大使館や、領事館などへ訪問する場合はフロックコートを被るべし。若し忘れた場合には恥ぢをかく。なるだけ帽は山高帽を用ゐる。汽車中、航海中は鳥打帽、夏は彼の地で上等のパナマを買ひ求めよ。日本よりは易すい。

食事の際大に注意を要す。スープを啜する時、チユーチユーいはぬやう。小刀と肉刺を

取る時皿にカチカチ音させぬやう、ナフキンは膝に置き、胸から掛けぬやう、スープは滴もあまさぬやう嘜する事ならぬ事、厭やになつたら、残りし置く事、器具やパンを落しても拾はぬ事、一皿すめば小刀と肉刺を二つ揃へて、皿に置くか、交叉して仰向けに爲し置く事、終れば二つ重ねて上に向けて置く事、酒や飲料水は食後其の場で金錢を支拂ふ事、ソースや酢は多量に用ゆべからざる事、朝は食事中新聞讀むでも差控へなき事等。固より各國に依り多少違ふて居る。要は唯郷に入れば郷に入れて其の國の風俗人情に従ふを好しとす。されど餘り氣兼ねする必要なし。例へば皿の音がしてはいかんと思ひ、音をさせぬやうにと苦心することはいらん。何にも西洋人だからとて豪らいのではないから、時々日本流でやるべし。米國では水を餘り飲む故、初めの中腹下ることあり。されど習慣となつて飲まねばならぬやうになる。歐羅巴へ行つても一寸なほり兼ねる佛蘭西、瑞西、伊太利は二食なれど英米人と日本人には朝丈、パンとハムと茶位い出る。其れから婦人が居たら、彼れをして先きに着席させ、彼れの食事の初まるを待ち、食

事にかゝる事、彼れの立ち上るを待つ事。残念ながら此の風にならふべし。

最も失敗し易き事故は各部室の出入に、鍵を下すことを忘れる事と、鍵を持ち去る事、便場にて、水を流す時餘り多く迸出するが故に、一時喫驚する事、夜、部室を出る時電燈を消さぬ事、風呂場で、日本流に湯を浴槽の外でかぶる事、湯を流さずに出る事、挨拶の場合頭を下げる事、ホテルなどの床板や大理石の上で、滑べり易き事、寺院、劇場、ホテル、汽車中などで喫煙する事、或は婦人の前で嘜ふ事、米國で、エレベートルに乗る時、婦人の居るを忘れて、帽取らぬ事、婦人より先きに出る事など何れも所謂赤毛布の失敗談となる。能く注意すべし。

海外旅行の必要は、世界的思想を養ふ事である。小さな島國的根性を打破して、世界を家と思ふて旅行せよ。世界と云ふ物は、廣いやうで狭い物、最捷徑の途を取らば僅々六十日位で一周出来る。交通機關の發達は、世界の縮圖をして小ならしむ。二十世紀は世界各國競争の世の中である。封建時代は一場の夢と化した。海外旅行と云へば、おつく

うなやうなれど、決して那麽物なでない。旅行者は海外萬里の地にありとも、屁とも思はぬ。言語不通でも、人情は同じである。左程不便な事も無い。今後世界の交通頻繁になるに連れ、觀光團の如き、内外續々企圖するに至るべし。余や世界一周して、外國人が日本へ来るよりも、日本人が海外へ出掛ける事甚だ少き事實を認められた。されば日本人にして、外國の事狀に通じやうと思ふならば、どしどし海外に旅行して、廣く世界に知識を求めんことを希望せざるを得ず。金錢と餘暇ある者は機會を利用して、奮つて、海外に出よ。殊に富豪の子弟は、先天的特權を有するを以て、宜しく海外旅行を爲すべし。古人の格言に曰く、百聞は一見に若かずと。外國へ行かずと聞いた事と、行つて見た事とは雲泥の差がある。願はくば今後團隊的旅行のある毎に。續々此の種の旅行に参加されん事を。

余や此の著を爲す。今後團隊的旅行を爲さるゝ人や、單獨旅行を爲さるゝ方々の、道案内を爲さんとするにあり。今左に余の旅行日程を示さん。

- 三月十七日神戸出發。(地洋丸) (一等)
- 同十八日四日市沖。
- 同十九日横濱上陸東京に入る。
- 同廿日横濱出帆、同廿九日迄で太平洋航海。
- 同廿九日布哇ホノル、見物、船中に一泊。
- 同卅日ホノル、出帆、四月五日米國桑港上陸。
- 四月五日から八日迄で桑港滞在。
- 同九日桑港出發(南太平洋鐵道)、十日ソートレーキ着。(一等)
- 同十一日ソートレーキ見物、其の日出發。
- 同十二日コロラドスプリング着。
- 同十三日スプリング一日見物、其の日出發。
- 同十四日流車中、十五日朝志嘉古着、十七日迄で滞在。

- 同十八日志嘉古出發、十九日ナイヤガラ見物、夕方出發、廿日朝ボストン着、廿一日迄で滞在。
- 同廿一日夕刻ボストン出發、フオール、リーバからプロビデンス船に乗り換へ沿岸航海を爲し、船内に一泊。
- 同廿二日朝紐育着、廿五日迄で滞在。
- 同廿六日朝紐育出發、夕刻華盛頓着、廿七日迄で滞在。
- 廿八日朝華盛頓出發、晝費府見物、夜紐育着。
- 同廿九日から卅日迄で、紐育滞在。
- 五月一日朝紐育出帆（ホワイトライン航路、アラビック號）（一等）
- 同一日より十日迄で、大西洋航海。
- 同十日英國リバープール着、正午出發（三等）夕方グラスゴー着。
- 同十一日グラスゴー見物。

○同十二日グラスゴー出發、蘇格蘭の湖水を渡り、山越へを爲し、夜エデンバラに着。

- 同十三日エデンバラ見物、
- 同十四日エデンバラ朝出發、夕方リーズ着。
- 同十五日リーズ出發倫敦着、廿一日迄で滞在。豫定變更三日間増加、ローマ、維納で減少。
- 同廿二日朝倫敦出發、ドーバ海峡を渡り、夜巴里着。（二等）
- 同廿三日から廿五日巴里滞在。
- 同廿六日朝巴里出發、夜瑞西ルザン着。（二等）
- 同廿七日ルザン見物。
- 同廿八日ルザン出發、アルプス山中を過ぎ、夕方ミラン着、其の日見物。
- 同廿九日朝ミラン出發、正午ゼノア着、其の日見物。

- 同三十日朝ゼノア出發、夕刻羅馬着。
- 同卅一日から六月一日羅馬見物。
- 六月二日朝羅馬出發、夕刻ナポリ着。
- 同三日ヴェスビアス火山に登り、ポンペイの跡を見、夕ナポリに歸へる。同四日ナポリ見物、夕出發、夜羅馬着。
- 同五日羅馬出發、フロレンス着七日迄で滞在。
- 同七日午後フロレンス出發、夕刻ヴェニス着、九日迄で滞在。
- 同十日早朝ヴェニス出發、夜維納着。(二等)
- 同十一日から十二日迄で、維納滞在。
- 同十三日朝維納出發、タドレスデン着、十五迄で滞在。
- 同十五日ドレスデン出發、夕刻伯林着、十七日迄で滞在、同日ポツダム見物、夜伯林出發。

- 同十七日夜から十九日の正午迄で汽車中。
- 同十九日から廿一日迄で聖彼得堡滞在。
- 同廿一日午後露都出發、廿二日朝莫斯科着、一日見物。
- 同廿三日午後十二時莫斯科出發(西比利亞鐵道、萬國寢臺會社)、同三十日午前五時イルクーツク乗り換へ(東清鐵道)、七月二日夜浦鹽着、(二等)、船中に一泊。
- 同四日から六日の朝迄で、日本海航海中(露國義勇艦隊、一等)。

大尾

世界一周記 完結

明治四十三年四月廿五日 印刷
明治四十三年四月廿五日 發行



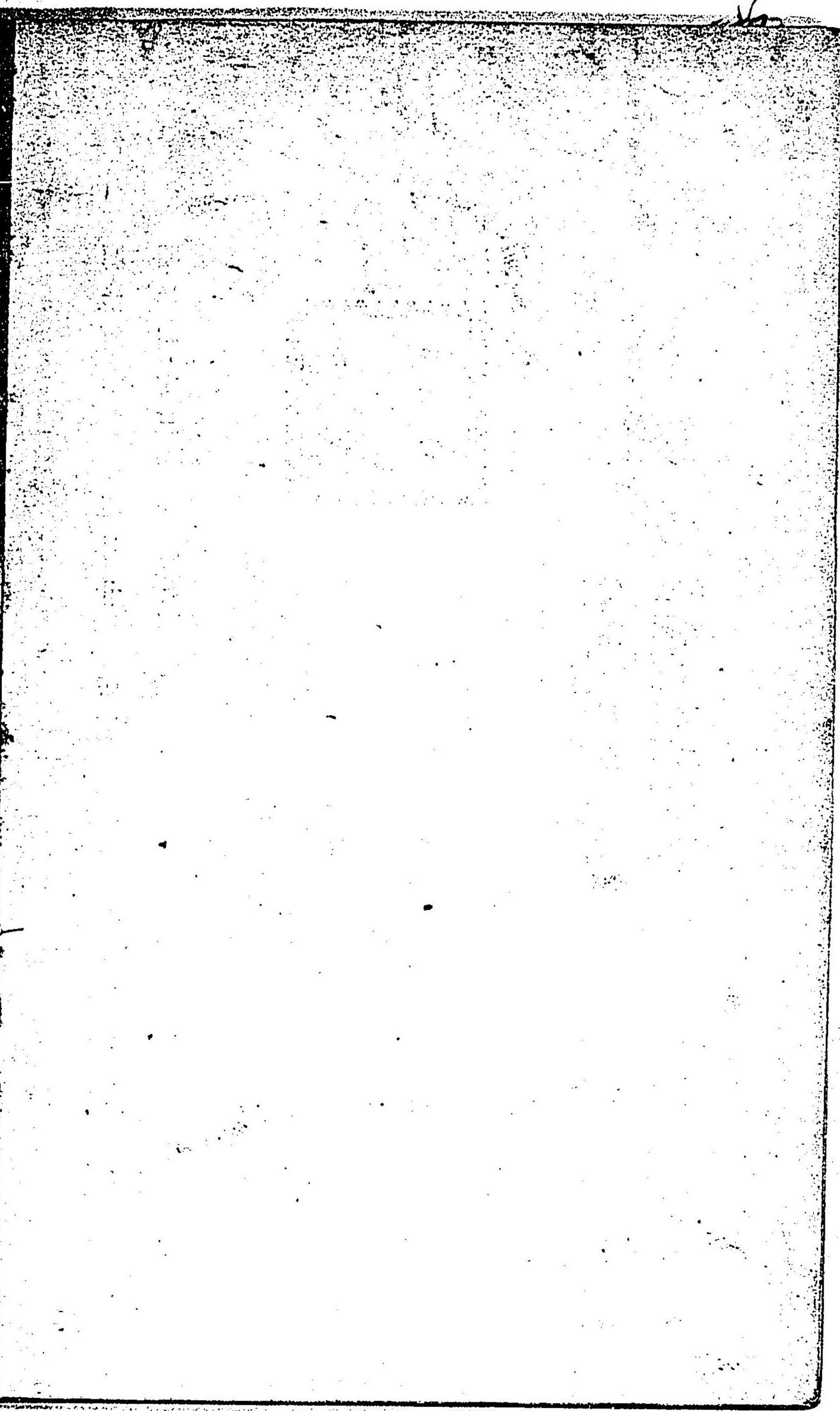
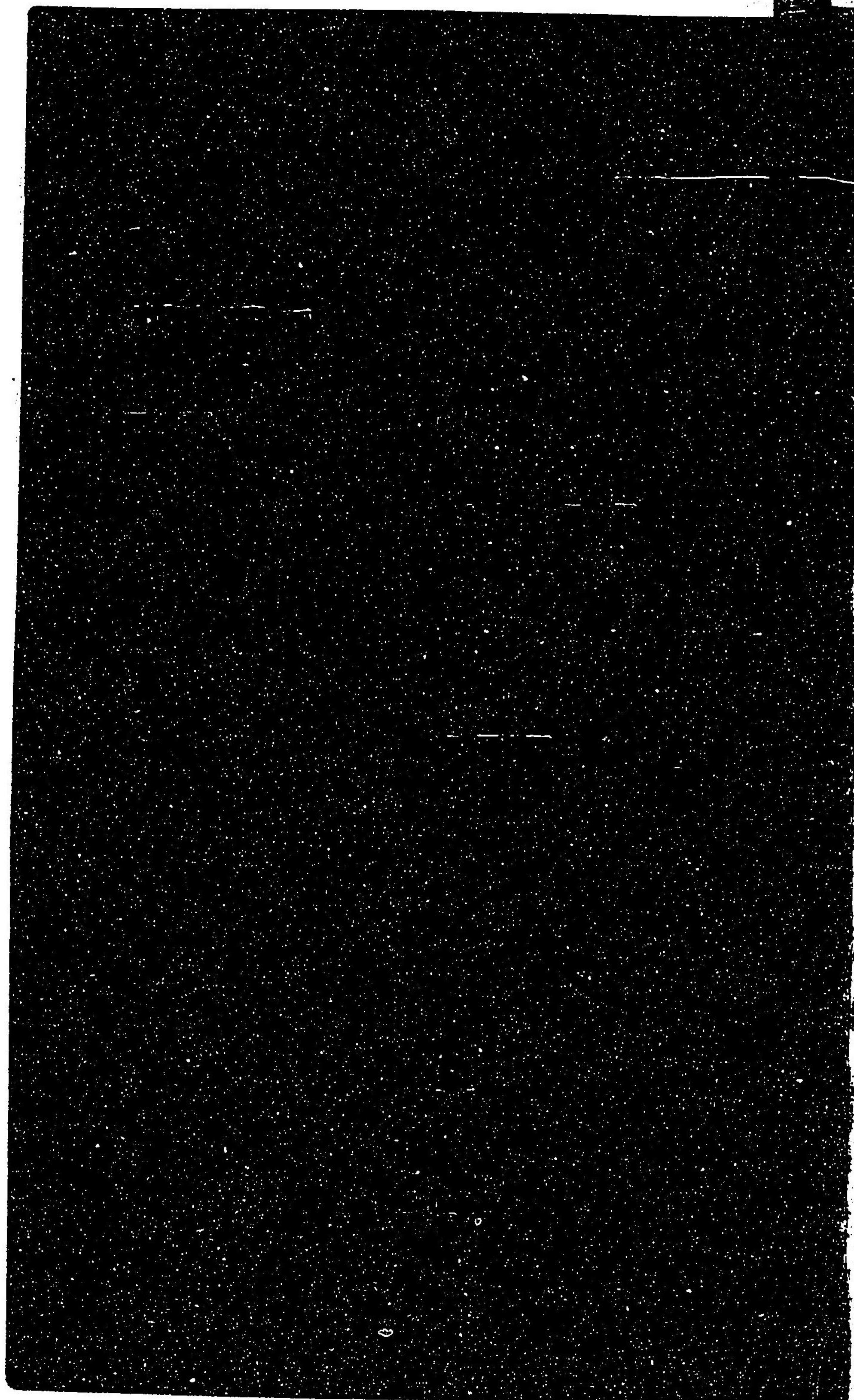
著者 田邊英次郎
發行所 大阪市東區北渡邊町八十九番屋敷
杉本
印刷者 大阪市東區本町二丁目三十番屋敷
村松茂
印刷所 大阪市東區本町二丁目三十番屋敷
株式會社大阪國文社

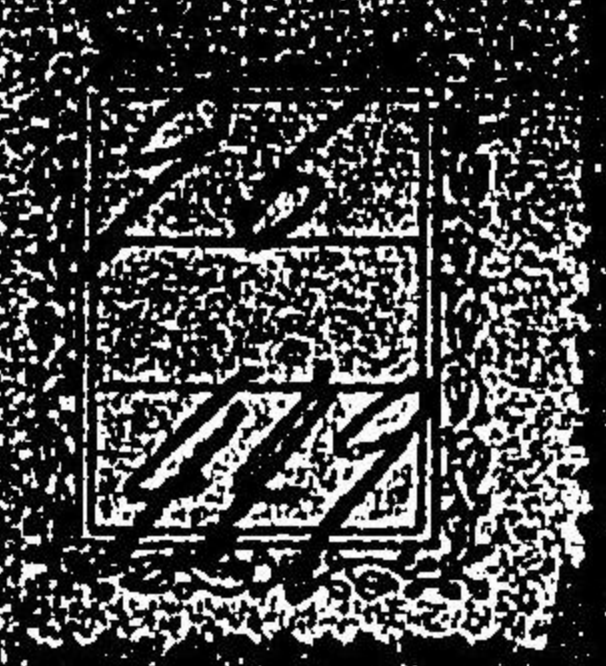
世界一周記
金七拾錢

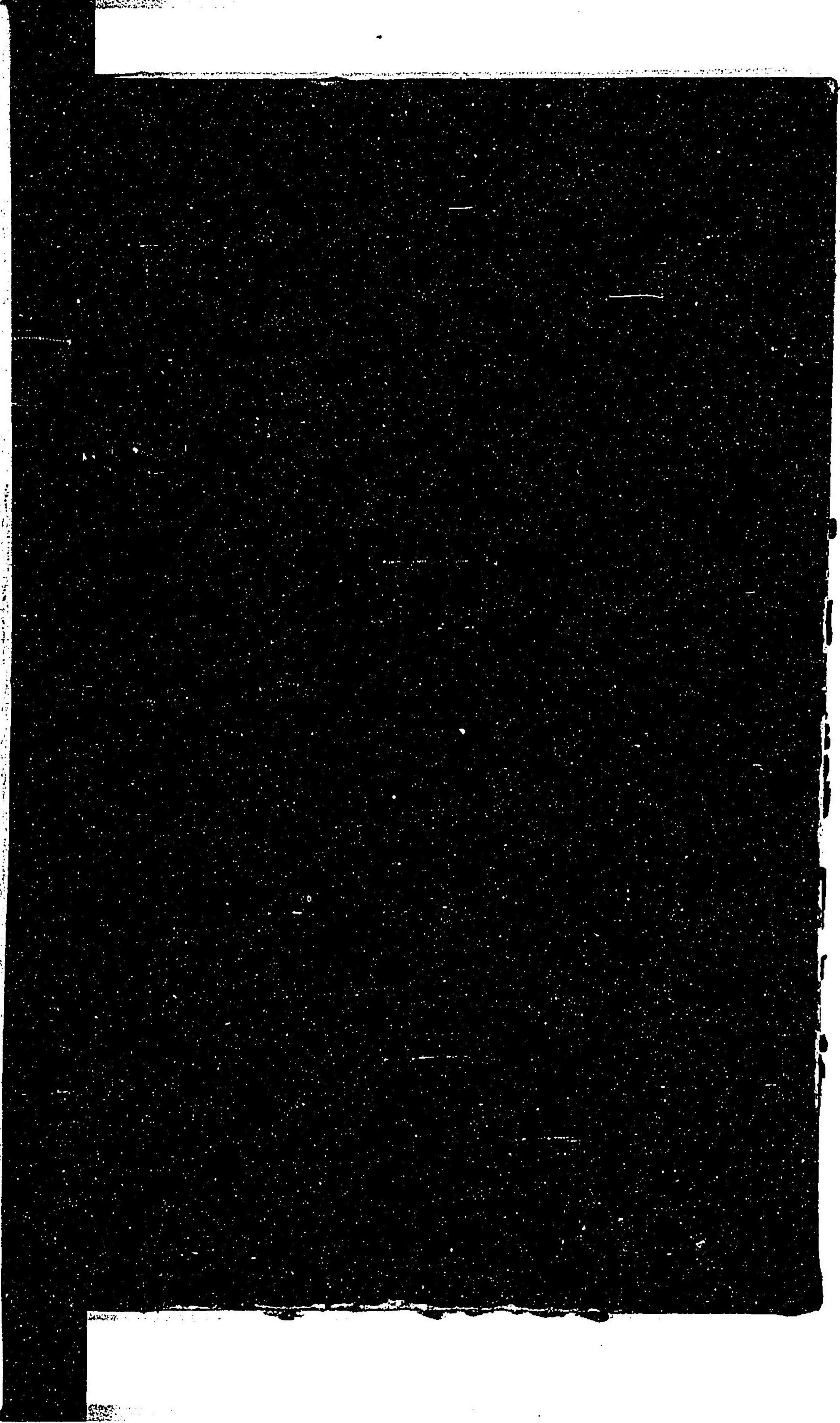
發兌元

東京市京橋區中橋廣小路
電話本局五七七番
大阪市東區北渡邊町
振替口座二八二三番

梁江堂書店
杉本梁江堂







96
449

022041-000-5

96-449

世界一周記

田辺 英次郎 / 著

M43

ADA-0374



